
勝手にコードギアス

七夜ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝手にコードギアス

【Nコード】

N8715G

【作者名】

七夜ソラ

【あらすじ】

ゼロレクイエム……悪逆皇帝と呼ばれたルルーシュは、『ゼロ』という仮面を被ったスザクに刺され、死んだものとされた。……しかし、彼は生きていた。それは、『偶然』でも『奇跡』でも無いのかも知れない。彼にはまだやる事がある。それを成すための『必然』なのだろう。目覚めたルルーシュの前に現れる謎の人物とは……。今、新たな変革が始まろうとしていた……。

Re:STAGE 00 (前書き)

この小説をクリックしてくださって感謝でございます。

第一にこの小説は全話が下書き状態です。
なので矛盾点が猛烈に存在します（おいっ

←を読んでからそれでもいいと言う方だけ次へどうぞ

この小説&作者は…

- ・文章の能力皆無
- ・脳内の言葉辞書ほとんど空
- ・漢字分かりません
- ・誤字、脱字有り
- ・都合の良い様に改造
- ・キャラのイメージ壊れるかも
- ・意味不明な言葉出没
- ・話が短いのも
- ・いくつもの矛盾点発生
- ・ギアスの細かな設定よくわからないんで自分で作っちゃいます（おい

それでも良い方はどうぞ。

あと、評価、感想してくれたらすっごい喜びます。

Re:STAGE 00

スザク、いや…ゼロが長剣を構え俺の目に前に現れた。

> i 3 9 1 8 — 5 8 9 <

覚悟はできている。

そう…

俺は…

今日ここで死ぬ。

その長剣を俺の胸に突き刺した。

その瞬間、胸に激痛がはしる。

そして、俺の胸からは鮮血が勢いよく噴き出した。

だが、心はこれまでにないほど穏やかだった。

赤い血が美しいと感じた

そう感じるのは自分のものだからだろう

他人の流す血は幾度と見てきたが美しいなどと感じたことはない

それが生み出すのは憎しみだけだ

そしてそれを生み出すのは俺で最後にしよう

争いのない世界を

二度と…

誰も涙を流すことのない

世界を…

「――ルルーシュ――！」

意識が薄れていく。

皆が口々に何かを叫んでいるようだが、俺の耳にはもう届かない。

しかし、歓喜の声なのだろう。

悪逆皇帝ルーシュは今日死す。

国民にとっては記念すべき日として受け継がれていくのだろう。

もう…

俺の死を悲しむものなどいない

自分で壊してしまった

だから俺は

その罰を受けよう

死してもなお疎まれる存在と

自分を犠牲にして世界を救う

光あふれる世の中にしよう

もう武器など必要ない世界に

そうゼロ

あとはお前次第だ

だが俺は信じてる

お前が…ゼロが

人々の光となることを…

ナナリー…

お前にとって危険な世界は俺と共に地獄へ持って行こう

お前はもう危険にはさらされない

――だから…

お前はもう一人でやっていけるよな

俺はもう必要ない

お前の望むことも成し遂げたから――

俺は………

朦朧としていた意識がそこで途切れた。

結局僕は、何をしたかったんだろう…？

こんな時、君がいてくれたらなっと思って思うよ、ルルーシュ。

君は初めての友達であって、一番の友達だった。

だけど、運命って残酷だよな。

せつかく再開できたと思ったら敵同士。

会ったときにはもう僕が手を伸ばしても届かないほどの闇の底に君はいた。

最初はどうしていいかわからず彷徨うだけだった。

でも、その時僕をゴールに導いてくれる人に出会えたんだ。

それも運命だったのかな。

でも…君は…

その人を殺してしまった。大事な大事な僕の…

それだけは…君を許すことはできない。
いつまでたっても僕は君を許さない。

でも、知っていたんだよ。
君が泣いてたこと。

どうして真実を話してくれないの？

それでも、許すことはできないけど…
理解しあうことはできたのに。

君はいつもそうだ。
一人で全部背負いこんで。

僕に一回も勝ったことなくせにさ。

全部僕に話してくれればよかったんだよ。
一人で抱え込むことなんてなにもないのに。

どうしてこうなってしまったんだろう？

人生のリセットができたらいいのにね。

そうしたら、僕はあのころに戻りたい。

三人で笑って泣いて喧嘩した。懐かしい思い出の日。

そんな日がもう一度来ることをずっと僕は望んでたんだよ？

君だってそうだろう？ルルーシュ。

僕たちは駄目だね。

いつつもすれ違いばかりで。

やっと君と顔を合わすことができた。

ガラス越しだけど僕はそれでも嬉しかった。

でも、

互いの温もりを感じることはもうできないんだね。

Re:STAGE 01

暗い闇から

外の世界へ出る夢を見た

俺が…心のどこかで望んでたこと

「起きろ、ルルーシュ」

――誰だ？

俺を呼ぶのは…。

光が差す…

俺はそれに答えていいのか…？

「相変わらずのろまだな。お前は」

「うつ！」

声の主が俺にのしかかった。
さらに傷口に触れられ激痛が走る。

ああ、誰か分かってしまった…。
一時でもこの女を光だと思った俺が憎々しい。

そして……。俺は生きている…？

痛さから逃れるため手を振り払い起き上がる。
まいてある包帯がに血が滲んでいた。

誰が巻いてくれたのだろうか…？
こんな俺を進んで助けるものなどいないと思っていたが…。

まさか…この女が…？
ありえないな。

「私ならそんな傷、数時間で治るがな」
やはり、そこには知った顔があつた。

「C・C…」
「やっとお目覚めか、坊や。なんだ？その残念そうな声は」

辺りを見回すとみた景色がひろがっていた。

俺の部屋か…。

俺が…ゼロレクイエムの後、どうなった？

あの子の状況が一刻も早く知りたい。

目がかすむ。

そして、なぜこんなところに俺は戻ってきているんだ？
よく入れたものだ。

「全く人騒がせな奴だ。私が自らここまで運んできてやったのだぞ
」

C・Cはわざとらしく自らを強調して言った。

自らじゃないだろう？

自ら誰かに頼んでの間違いでは？

ばやけていた景色もだんだんクリアになっていく。

そうだ！ナナリーは？

俺の予想では何の問題もないはずだが。

頭が覚醒して一瞬にして浮かんだ最愛の妹。

やはり心配だ…

「ナナリーは…どうなった…？」

言葉を発するのがこんなにつらいとは…
一言でもしゃべるのが苦しい。

「心配するな。お前の最愛の妹は無事だ」

よかった…

まずは一安心だ…

ムツとした顔のＣ・Ｃが答えた。

…？

ああ、さっきのを無視したからか。

「ナナリーはどこにいる？
それと俺は何故ここにいる？」

「うつ…」

思わず大声が出て傷に響く。
血が再びあふれ出る。

「五月蠅い。傷が、開くぞ。あと、質問は一つにしる」

Ｃ・Ｃ・はうるさそうに耳を押さえている。

「ナナリーは…どこにいる？」

一言一言ゆつくりと喋る。
少しはマシだ。

「さあ？」

さあって！…！！…！！

お前さつき、何て言った？無事だと言ったろう？
それにはどういう確信があって決めつけた！？

…。落ち着け…。

そつだ、俺の計画には失敗などない。
ナナリーはブリタニア１００代皇帝として存在しているはず。それ
にスザクもいる。
何不自由なく暮らしているだろう。

だが、必ず会いに行くからな。すぐにでも！

「そうか…、なら…次の質問だ…。何故…俺はここにいる？」

「だから言つたろ？私が運んで来てやったのだ」

フン、と鼻を鳴らしながらＣは言った。

違う！

俺が知りたいのはそういうことじゃない。

「それはわかった…。俺は…どうして生きている？」

「奇跡だな」

なんだ、その答えは！

なんというか…もっと詳しく説明できないのか！？この魔女が！

ぐっ、とこぶしに力を入れる。

うっ…痛さに顔を顰める。

体に力が入ると全身に激痛が走る…。

これ以上俺が望む答えが返ってこないのを長い付き合いから俺は知っている。

自ら調べるしかないか…。

皇帝が死んだ（死にかけた）のだ。

いくら悪逆皇帝とて少なからず情報はあるだろう。

あつ、と思い出したようにＣ・Ｃが言った。

「とりあえず、お前は死んだ事になっている。皇帝ルルーシュは滅んだとな」

「そのほうが都合がいい」

そつと呟く。

「そういつと思ったのな。無駄な労力をわざわざ私が使ってたのだ」

たまには役に立つところもあるではないか。

俺が生きていると知れたら俺が今までしてきたことになんの意味があるのか分らない。

「そうか…ありがとう」

「む、」

と、少し照れくさそうにＣ・Ｃは答えた。

振り返れば長かった。

理想の世界の現実。ただ、それだけを望んでいたのに。

あまりにも犠牲が多すぎた。

……

始めのシナリオではこんなはずじゃなかった…。
無意味な死はなかったはずなのに…。

理想の世界の現実はあまりにも難しい。

今はもう平和なのか？

戦争が二度と起こらないという確信はない。

だが、あのときの俺は前に進むしかなかった。
今はちがうはず。

そう、やっと俺は…

『トントントン』

その時、ドアをノックする音が響いた。

「待ってる」

C・Cがドアの開けに立ち上がる。

おい、何を言っただこの魔女！！

俺は死んだことになってるのではないのか！？

ちょっと待て！C・C！！それはダメだ！

声にならない叫びを上げる。

必死にC・C・を止めようとするが体が言うことを聞かず、ベッドから転げ落ちてしまった。
ドアのほうに顔を向ける。

時すでに遅し。

そこにはすらっとした若いひとりの男性が立っていた。年は二十歳くらいか。

やけに清潔感のあるやつだ。黒のスーツに身を包んでいる。
整えられた銀色の髪、男にしては少し長めだ。(俺も人のことを言えないかもしれない)

黒縁の眼鏡の中には蒼い瞳。

彼は深々と礼をしてから部屋に入る。

「お邪魔します」

低いがよく通る声だ。

誰だ？

しかしC・C・が親しくしてる所をみれば害があるものではないの
だろう… たぶん。

「初めまして。ルルーシュ様、私はキャノルと申します。あの…、
ルルーシュ様？何故その様な格好をなされているのですか？」

顔が熱くなるのを感じた。

「いや…なんでもない…」

初対面で…俺に恥をかかせやがって。
くっ…屈辱。

C・Cがいきなり切り出した。
俺を起こそうともしないで。

「やらなければいけないことは、まず、お前の傷を治すことだ」

「治るまで…待てと…言うのか？」

言ってる事とやってる事が違う。

それなら俺をまず起こせ！

なんとか自力で起き上がる。

「違う、今、治す」

「どうやって…？」

「すいません、もっと早く治して差しあげたかったのですが、私の能力は意識のない方には無効になってしまつので…」

その瞬間キャノルの右の蒼い瞳にギアスの紋章が浮かび真紅に輝いた。

「なっー」

まさか！

紅い光が体を包む。

光が消えた後にはあれほど深かった傷が一瞬にして治っていた。

ギアスカ…

「傷を治すギアスカ…便利だな」

キャノルはこくつと頷いて口を開いた。

「でも、少し違います。私のギアスは傷を移すギアス。ほら、

とキャノルは窓の外を指す。

窓の外には一人の男が倒れていた。

確か、ここの学園に雇われていた…庭師か何かだったか。

だが、特に親しくもない人間だ。
俺には関係ない。

ちょうど俺が刺された場所と同じ位置に血がにじんでいる。

あいつに俺の傷を移動させたのか。

「何かを救うには何かを犠牲にしなければならない」

キャノルはうつすらと笑みを浮かべた。

「あのままでは目立ちますし、私はあの男を片付けてまいります」

そついうとさつと部屋を出て行ってしまった。

戸が閉まる音が響く。

確かにそついえるだろう。

だが、本当にこれでいいのだろうか…？

俺は…何を望んでるんだ？

「そつだC・C・ナナリー達も俺が生きていること知らないのか？」
「そつだが？」

俺は…

「そつか。それにしてもよくあんな大人数の中、誰にも見つからず俺を運び出せたな」

「まさか。お前が病院に運ばれてからだ。そこでお前は死んだとされてる」

じゃあ…俺が生きているって知ってる奴がいるのでは…？

「案ずるな。お前が生きていると知ってるやつはいない。知ってるとしたらあいつだけだ」

では、キャノルは俺専属の医師とかなろうか。
だから、姿は誰にも見られなかったと…。

だが、死体もないのにどうやって？

Re:STAGE 01 (後書き)

見苦しい文でスイマセン(汗；)

それでも読んで頂きありがとうございます。

コメントをしていただけると励みになります。

Re:STAGE 02

「おい、そろそろいくぞ」

沈黙を破るようにC・Cは言った。

「どこへ？」

それに答える。

「どこつて、ナナリーに会いにいかないのか？最愛の妹に一刻も早く会いたくてウズウズしてるくせに」

なんだその言い方は…俺はそこまでシスコンじゃない！
確かに一刻も早く会いたいが…。

「冗談だ」

…。こいつは……。

「お前、自分が何日眠っていたか知ってるか？」

「それがどうした」

一体なにが？

「一週間だ」

俺は一週間も眠っていたのか。
だが、それがどうした？たった一週間。

「一週間あれば世界が変わることもある。お前がしたようにな。ブリタニアがまた日本を支配しに来た。しかも状況は前よりひどいことになっている」

何！？

俺が作り出した世界も無意味だったというのか！？

そして、どうしてそれを阻止できなかったのだろうか？

何故また悲劇を人は繰り返すんだ？

皇帝はナナリーのはず。そんなことをナナリーがするはずない。

「何故そんなことに？」

「^{ギアス}力があればどうにでもなる。その後は想像つくだろう？」

まさか、ナナリーを使っているのか！？

「ナナリーは無事なんだろう！？」

「さっきも言っただろう？無事だ。ナナリーはな」

ナナリーは？

ナナリーさえ無事ならいい。それ以外にだれがいるんだ？

「おい、お前。親友のことを忘れたのか？」

ふっと胸をなでおろす俺にC・Cは言った。

まさか、スザク！？

あいつが何故？あの体力バカが捕まるわけなどない。
それに生きるとギアスもかけてある。

「スザクか？」

「確かそんな名前だったか。どうせ助けにいくのだろう？」

そう、裏切られても俺には親友を捨てることはできない。
信じることをやめたとしても。

俺が選ぶ道は一つ。

行動しなければ何も始められない。

そんなことは分かっている。しかし、今の俺は何も持っていない。
ただのちっぽけな人間だ。

ギアスがあつたとしても敵地に乗り込んだところで蟻のように踏み
潰されてしまうだろう。

そういえば敵って…誰だ？

ブリタニアには俺の邪魔をするものはいないと思っていたが。

俺がこんな肝心なことを忘れているなんて。

「敵の指揮官は誰だ？」

「それが分かったら真っ先にお前に伝えている」

…。

さっそくの行き詰まりか。

詳しい状況はC・C・に聞くより自分の目で判断した方がいい。

今、しなければならぬ事は…

「さて、まずは仲間か…」

さすがに1人では何かときついからな。

日本人はブリタニアに憎しみを抱いているはず。まずは日本人居住区に向かってみるか。

黒の騎士団が再び結成されているかもしれない。
いや、必ずそれらしきものが結成されているだろう。

問題は、黒の騎士団のメンバーだったやつはもう俺の下にはつかないだろう。
そしてブリタニア人の俺に力をかす者などいるだろうか。
どうにかしてまた俺の下に戻ってきてはくれないだろうか。

……カレン、無事だろうか？

今、彼らがあそこにいるか確信はないがな。

「いくか…。C・C・お前はここで待て」

今の状況はよく分からないが、こいつはいろいろとまずいな。

（俺もだが、変装でもしていくか。ゼロの仮面がないのが残念だ）

「ああ」

C・C・は早速ソファーに寝そべる。

窓を叩く音がした。

キャノルだった、鍵をといて開けてやる。

「あの、私は？」

どんだけ耳がいいんだ…。

それとも俺の声が大きかった？

今は周りに人がいないからよかったが、これからは気をつけないと。

「好きにしろ」

外にはいつもどおりの美しい庭が広がっていた。

一滴の血さえ落ちていない。

キャノルか…仲間であれば心強いが。

今は様子見た。

「では、お付き合いします」

嬉しそうに顔を綻ばせながらキャノルは言った。

こいつの表情。言動。

どうもつつかかるものがある。
何かはわからないが…。

まあ、これも黒の騎士団の活動でついってしまった癖のようなものだろう。

前進するには警戒をとくことだ。

「じゃあ、行くか」

「さて…」

とりあえず適当に変装してみた。

変装といっても帽子を深くかぶりサングラスをかけたぐらいだ。これならただ顔を隠してるだけと言った方が近いだろう。服もいつものシンプルなシャツとジーンズだ。

しかし、まあ、何もしないよりはマシだろう。

外に出るとすでにキャノルはいた。

彼も堅苦しい服を脱いでラフな格好に着替えていた。

しかし、どこに着替えが…俺のではないし。（まずサイズがあわないだろう…キャノルは俺より10センチほど背が高いしな）

「いこうか」

リヴァルが乗っていたようなバイクに乗り道路をはしる。（黒の騎士団活動の際購入しておいた）
もちろん運転はキャノルにまかせてある。

バイクは爽快に走り抜ける。

俺たち以外、バイクや車は一台もない。

だからこれがすごく目立つ。身を隠したいんだが…。まあいいか…人影もないのだから。

だが、何があったというのだろうか？

軍が攻撃してきた様子もなく前見た状態と変わっていない。
変わったといえbaumも混雑している通りが人の気配さえないことだ。

これではゴーストタウンではないか。

本当に黒の騎士団などは活動しているのか？

車がないのいいことにバイクのスピードがあがる。

今、スピード違反取締をやったら確実に捕まっている。

風が頬をなでる。実に気持ちがいい。

こつ、思えるのも生きているからこそだろう…。

お互い、沈黙のまま時間が過ぎる。景色が流れる。懐かしい光景だ。

目を瞑りあのころを思い出す。

そう、あのころは、リヴアルが隣にいた。口口も…

あの頃はもう戻らないだろう…戻りたくても…

だが、俺が一步踏み出した時から、それは覚悟していた。

幸せな世界のために。

俺は間違っていない。そうだろう？

「つきましたよ」

深い心の中にいたルルーシュはその声で感情を打ち消す。知られ

たくない。

それにしても時の流れは、はやい。今も、昔も。

「ああ」

着いた場所は昔黒の騎士団の活動を行う際の本拠地として使っていた古びた倉庫だった。

様子は何も変わっていない。

もしかしたら中に誰かいるかもしれない。いれてくれるかどうかの問題だが。

「誰もいないですね」

辺りを見回す。確かに見える場所には誰一人いない。

それを確認してバイクから降りる。キャノルもそれに続く。

「少し探ってみるか」

「倉庫の中に入るんですか？」

「いや」

正面から行っただころで絶対に入れてもらえない。誰かがいたとしたらだが。

やはり正面からいくのは危険だ。かつてのメンバーは俺に敵対しているのは分かっているのだから。

「裏に回ってみるか」

警戒しながらキャノルと並んで倉庫へ近づく。

正面の大きな扉にはそれに見合った大きさの南京錠がかけてあった。

もとから正面から入るつもりはないが。

裏口は開いているかもしれない。

正面を調べ終え、倉庫の裏側へ回り込んでいった。後ろからキャノルが続く。

数メートル歩いた先にはドアノブがついた扉があった。

「ここだ」

やはり、こちらにもしつかりと鍵がしてあった。

「だめだ」

「どうします、強行突破しますか？銃は持ってますよ」

何を言い出すんだこいつ…。

仲間になってもらうつもりで来たのにこっちから喧嘩ふっかけてどうするんだ。

「お前、目的分かってるか？」

「あ、仲間を集めるんでしたね」

強行突破してギアスを使えばいいのに…とキャノルは小声でそれに付け足したが俺はそれを無視した。

偽りの戦力はなにかと不便だからな。

…それに、もう彼らを縛りつけたくない。

仕方なく道を引き返していた。

『ドカツ』

何かを殴る鈍い音に何かが地面に倒れた音。

まさか——！！

「キャノ——」

振り返ろうとした時だった。

「動くな——！」

『カシヤ』

それにく続く嫌な金属音…背後から銃を構える音。

くそっ。

抵抗する意思はないと両手をあげる。

「壁のほうを向け」

何者かの言う通りに壁のほうを向く。

この状況で不用意に動くのは危険だ。

スザクなら簡単に銃なんて奪ってしまっただろうな。

俺にもその才能の一部でもあればよかったのだが。

「ああ、カレンさん。どうします怪しい男がここをうろついたもの
ですから」

今、カレンと言ったか？

「カレン？」

「ルルーシュ…？」

カレンは俺を声で分かってくれたようだ。

「ルルーシュだと！？お前、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアか！？」

冷たい金属が背中当たられる。やはり俺を憎んでいるか…。

「やめて！！」

「…はあ」

着きつけられていた銃が下りる。

これでやっと動ける。この場にカレンがいたのはラッキーだったな。カレンがいなければ俺は殺されていたかもしれない。

「もう、振り返ってもいいか…？」

「ええ」

振り返ったと同時に深くかぶった帽子とサングラスをはずす。

横には黒の騎士団のユニフォームを着たカレンと男がいた。

男の顔はどこかで見たとような気がするんだけど、黒の騎士団のメンバーだったのだろう。

さすがに俺でも全盛期の騎士団のメンバーを全員覚えるなど不可能だったからな。

「久しぶりだな」

「ルルーシュ生きていたのね」

平然をよそおっているが顔が喜びを現している。
俺が生きていることに対して喜んでくれているのか？

「奇跡的にな」

軽く頷く。

その時、後ろで音がした。

その瞬間キャノルがさっと起き上がってカレンの横にいた元黒の騎士団メンバーと思われる奴の首を後ろから一方の腕でしめ、もう片方の手に握られた銃を男の頭に突き立てた。

気絶したふりをして逆転のチャンスを狙っていたのか。よく映画などで見る光景だ。

しかし、手際がいいな。軍にでも所属していたのだろうか。

いや、そうじゃなくて！

「止める、キャノル！！」

キャノルと向き合って説得する。

キャノルは目をぱちくりさせてこちらを見た。まさか止められるとは思っていなかったのだろう。

「何故ですか？ 私たちを襲ってきたんですよ？」

…。

「こいつらは、嘗ての俺の仲間だ。だから、放してやってくれ」
「…分かりました」

キャノルは乱暴にその男を放した…というよりは突き飛ばしたというほうが正しいだろうか。

Re:STAGE 04

「カレン、何やってんだ！！そんなひよろひよろお前なら直ぐに取り押さえられるだろう？」

また後ろから声がした。

どうやら俺は後ろを取られやすいらしい。今後気をつけよう。

玉城真一郎

声を聞いただけで誰か分かってしまった。分かりたくもなかったが。

しかし失礼なやつだ。誰にものを言っている？
隣でカレンは気まずそうに顔をしかめている。

「いや、玉城こいつは…」

カレンが言つのを最後まで聞かず行動する。
まさにこいつらしい。

「ん〜？」

わざわざ回り込んで玉城が俺の顔を覗き込んでくる。

「あぁっ！！！！」

しばらく首を傾げたかと思うと今度は大音量で叫びだした。

「うるさい」

皆から突っ込まれても平然としている。

目の前の現実を理解するのに精一杯なんだろう。こいつの脳は。

キャノルもなんですか、こいつは？というような目つきで玉城を見ている。

「お前は……」

顔が近くて鬱陶しい（臭い）ので、玉城がいる方と逆を向いて言っ
た。

「ルルーシュ・ラ——」

皆を言い終わる前に答える。

「ゼロ……!」

またもや大音量で叫ぶ。

何のために俺は名乗ったんだ？

それにその名を大声で言うな。何のための名前なんだ。

それにキャノルは…無反応。

玉城に対しての汚いものを見る目つきを続行している。

C・C・といったのだから俺の正体はだいたい知ってるのだろう。
しかし、どうC・C・と関わりが？

「この馬鹿も仲間だったんですか？」

「…ああ」

認めたくないがな。

キャノルは首を振って銃をしまった。

そして、玉城の顔色の変化は言うまでもない。

「なんだよ、お前ら！！さっきから人を馬鹿呼ばわりしやがって！！」

ビシッと指先を俺に向け口が裂けそうなほど大口で叫んだ。

全く、暑苦しいやつだ。

「うるさい、玉城。馬鹿だから馬鹿といわれるんだろ。暑苦しい、どっかいけ」

「カレン！」

まさかの味方からの攻撃にあって玉城はいじけた様子でどこかへ行ってしまった。

「キャノル、お前もバイクの方に戻ってくれないか？すぐ戻るから」

「はあ…」

話の展開がきになるのだろうが、キャノルもしぶしぶ引つ込む。

「やっと二人きりになれたな」

「ええ」

二人で俯く。

考えていることは同じなのだろう。それをどちらから切り出すかだ。

俺から切り出したとなれば俺がカレンの下につくことになるそれでは意味がない…。

カレンも俺のことを信用できるか図りかねているようだ。

ギアス…便利だが厄介な力だ。

俺が下につくしかないのか？

いや、それではダメだ。

スザクを救うためにも日本のためにも…俺が指導者にならなければ！！

沈黙が続く。

くっ…仕方がない。地位は奪ってトップへ這い上がってやる。

今の黒の騎士団のリーダーは誰なのだろうか？普通に考えたら扇だろっが。

「ルルーシュ」

さつと顔をあげる。

どうやら俺が勝ったようだ。

「なんだ？」

あえて何も考えてないよう振る舞う。

「助けて！！お願い、ル…いや、ゼロ。私たちのリーダーはあなただけよ」

「一体なにがあつたんだ？」

不安げに問うが心の中では笑っていた。

ブリタニア！今に見ている！！今度は国も総て破壊してあげよう。

「知らないの？」

「ああ。さっき気がついたばかりだからな」

「そう…。どこから説明したらいいんだろう…。私こついつの苦手だから、上手く説明できないと思うけど」

と言うとカレンは語りだした。

カレンの話で分かったことはこうだ。

俺が99代皇帝として死んだときすぐにナナリーが後をゼロと共に次いだ。

真っ先に行われた事は植民地の解放。

日本だけではなく、他の植民地とされていた国も解放されていたようだ。

だが、当然それではそこにすむブリタニア人の反発が来る（一般人はともかく貴族どもが）。

そしてすぐにそれをまとめた組織ができたそうだ。

そう、かつてゼロをリーダーとして活動していた黒の騎士団のような組織が。

その組織が真っ先にしたことがブリタニア皇居の侵略。ナナリーの皇位の剥奪。

（ではナナリーはどうなったんだ？）

まだその組織ができてから3日ほどらしいがとてつもない戦力にな

っている。

以上。

全く、やってくれるよブリタニアのお貴族様は。

「ルルーシュ着いてきて」

カレンが俺を手招きした。どうやら倉庫の中に入れてくれるらしい。

「こつち」

導かれるままついていく。

なんだ誰もいないじゃないか。

倉庫の中は思ったより広く暗かった。

こんなに広かったか？記憶もあいまいになってきている。

「ついてきて」

「ああ」

だが、明かりがないと困るほどの暗さではない。

倉庫の隅の方へ向かう。そこにはいかにも頑丈そうな扉があった。かつて騎士団の活動資金を保管しておいた場所だ。

そしてカレンがその扉を片手だけで押し、開けた。

さすが、カレンだ…。

中は明るかった。暗い所に目が慣れてしまっていたので目が痛い。しばらく瞑っていた。そして目を開ける。

え……？まさか…
ナナリー！？

その部屋の奥に逃えられた椅子に深く腰掛ける少女。

「ナナリー！」

何故こんなところに！？

いや、でも無事でよかった！

（無事だと言われているにもこの目で確認するまではすこしばかり不安があつたからな）

「こんにちは、お兄様」

ナナリーの声。

（たった数日間だが）懐かしい。

暗い闇に閉ざされた世界から解放されたはずなのにどうしてまた戻って来てしまう。

「どうして、こんなところにいるんだい？」

少し憂いの表情を見せナナリーは答えた。

「私の代わりにスザクさんが…人質になってくれたんです。それで、騎士団の皆さまにかくまってもらっていたんです。……お兄様。スザクさんを…助けてあげてください！」
「もちろんだ」

遙か高い空

風が吹く

空は晴れ渡り

鳥が空を飛び交う

自由な世界

夢は覚めない

現実動く

私たちは光を失った

失ったことさえ

気づかないものもある

闇の縁へと

私たちをもつ

導いてくれるものはない

夢と現実

全ては偶然なんかじゃない

この世には

必然のみ存在する

だが、まだ

それに気付かない私たちがいる

――

大都市のど真ん中、誰もいない
大画面のテレビの音だけが聞こえる。

「ルルーシュ皇帝に……黙祷」

今日は第99代皇帝ルルーシュが亡くなってちょうど一週間である。
テレビで皆に訴えるようルルーシュの冥福を祈るのは彼女だけだろ
う。

「お疲れ様です、ミレイさん」
「ありがとう」

いつもの笑顔で返す。

しかし心はそれと正反対だった。

ルルーシュ…

あなたが生きていてくれたら…。

――――

部屋にもう何日もこもってる。

外にはでられない。

することはない。

臆病な俺では何もできない。

「ルルーシュ…」

テレビの向こう側ではかつての会長が副会長ルルーシュの冥福を祈る。

なんでこうなっただんだ？

俺にはそう思えない。

どこかで生きてるんじゃないのかって思う。

そんなはずないのにな…。

何でだろ。

長いつきあいだったのに。
涙もでないんだ。

ルルーシュ…
戻ってこいよ。

――――

現実を見失えば

滅びる他ない

未だにこの世界で

光を見失うことない

者もいる

それは彼らが

現実を受け止め

深く知ったからだろう

しかし

それでも希望は捨てず

光を追い続けているからなのだろう

だが、光の先は必ずしも

望みのものがあるとは限らない

Re:STAGE 05

「ありがとう…、お兄様」

ナナリー…スザクが捕まったのは自分のせいだと思ってるんだね。すぐにその苦しみを取り除いてあげよう。

「まず場所を移動しないか？」

ナナリーをこんな埃っぽいところにずっと置いておけるか！

「よし、俺に任せろ！」

ああ…忘れてたよ…こいつがいたの。

「しっかしまー似てねー兄弟だな」

…。

「妹はこうもお人好しなのになあ。兄のほうはなんでこんなにひねくれてんだか」

ギアスをかけてやろうか…二度と喋れないように…。
一瞬本気でそう思った。

「まあそれがいいのかもな」

いまさらフォローしたって遅い。

それにしても他のメンバーはどうしたんだ？

ここが本拠地だとしたら3人だけなんておかしい。

「扇たちは？」

「扇さんは総理だからこんな活動には参加できないのよ。他のメンバーは武器や食糧を補充しに出ているわ」

扇が総理大臣か。俺の予想通りだな。

「さあ、行こうか！俺についてこい」

「なんでお前についていかなければならない！？」

ナナリーが手を差し出してきた。

「お兄様、車いす持ってきてくれませんか？」

「分かったよ。ナナリー」

車いすをナナリーのそばに置きナナリーをそれに乗せてあげる。
ふう…汗が出てきた。

「じゃあいこうか」

出口を目指す。

だいぶ、時間がたってしまった。キャノルはまだ待っていてくれるだろうか…。

ナナリーの車椅子は当然俺が押している。その横を玉城がはりついている。

鬱陶しい…

カレンは後ろだ。

「どこかい場所あるか？」

カレンと玉城に問う。

「ルルーシュのうちはだめなの？」

カレンがそれに答えた。

「いや…」

裏口に回れば大丈夫だろう。

そういえば、咲世子はどこに行ったのだろうか？

「じゃあ、そうしましょ」

「わかった。アッシュフォード学園は知ってるよな？その裏に回って待っててくれ。できるだけ音の立たないようにしてくれよ」

「は？何言ってるんだ？俺たちも一緒に運んでくれるんだろ？」

お前こそ何言ってるんだ？

「いや、俺は二人乗りのバイクでここに来たんだ。だからお前たちは乗せられない。車か何かあるだろ？それで行ってくれ」

「それがねえから言ってるんだろう？」

は？

「ごめんなさい、他のメンバーが全部乗ってちゃった…」

…。帰ってくるのを待つか？

いや、できるだけ俺の存在は知られたくない。争いになるだけだしな。

……。仕方がない…。

だが、外にいるキャノルを含めて6人だぞ！？やっぱ無理だろ？

「いや、でも二人乗りに6人だぞ？」

「大丈夫だって。原さんには残ってもらってから」

原…？誰だ？

「ええ！！私一人でここはさすがにいやですよ！！」

ああ。こいつか。原…確かに騎士団にいたような気がする。

そして6人から5人に減ったところで何が大丈夫なんだ？その根拠はなんなんだ？

その自信を他の場でいかせないものか。

「あ、ナナリー外だぜ。目が痛いなあ」

ナナリーを呼び捨て……

「ぐわっ」

「動くなって！」

「動くなと言われても・・・この状態じゃ無理だろう」

「がんばって体を支えろ」

「それができたら・・・苦勞は・・・しない・・・」

風と乗ってる奴らの腕やら足やらがぶつかってきて、定期的に振り落とされそうになる。
なんでこんなことに・・・。

「大丈夫ですか？」

操縦をしているキャノルは涼しそうな顔をしている。
彼はただ操縦しているだけなのだから当たり前だが。

俺が操縦したほうが良かったかもしれない・・・？

「だから俺は、最初から無理だと言ったんだ！」

「ふふふっ、いいじゃないですかお兄様。すごく楽しいです」

「そうかい？」

それはそのはずナナリーその人だけは中央のいすに腰掛けており振り落とされる心配は皆無だからだ。

もちろんナナリーが強引に座ったわけではない。

その時力レンと目があった。

「またあなたに会えて嬉しい」

「俺もだ」

「ルルーシュ……」

カレンはじつと俺の顔を見てる。

その時、俺とカレンの間に玉城が割り込んできた。

ただでさえも狭いの……。

「おいカレン、俺たちがいること忘れるなよーいちゃいちゃするのは二人だけのときに――」

そのときカレンの一発が玉城の顔面にヒットした。

「ぐはっ！」

その衝撃で玉城が道路に落ちる。

「あ……」

「放っておけ」

「いいんですか？」

「ああ」

「お兄様少しかわいそうじゃありませんか？」

「いや、そんなことないさ。ああやって、人は成長していくんだよ」
「そうなんですか！」

ナナリーは眩しい笑顔で頷いた。

玉城がいなくなっって少し広くなった。

スピードも少し上がる。

玉城はもう見えなくなっていた。

今、車などは一台も走っていない。轢かれることはないだろう。

「学園が見えてきましたよ」

カレンはその景色をじっと見ていた。

Re:STAGE 07 (前書き)

コメントありがとうございます！

Re:STAGE 07

見えてからはすぐだった。

あつという間に学園に着いたと同時に俺はバイクからおりた。
やっと、あの、圧縮感から解放された。

「なつかしい…」

カレンは校舎を見ながら呟いた。

ルルーシュ達はアッシュフォード学園自慢の校庭に移動した。
堂々とここにいるわけはあたりに人が全くないからである。

やけに静かだな…。今日は水曜日だし。祝日？
いや、違う。

どこにも人がいない。

朝、うるうるしていた管理人たちもいない。まあ、彼らは仕事を終えて帰っただけだろうが。

生徒たちの姿も全くない。いつも放課後は部の活動やらで割とにぎわっているのだが。

やはり、新たに起こりそうな戦争への警戒だろうか？

まあ…かえって好都合だ。

それより問題はこんなところではナナリーの体が冷えてしまう。

「ナナリー、部屋にいこうか」

「ええ」

カレンとキャノルもそれに続く。

部屋の中はもう薄暗くなっていた。

「C・C？なぜ、明かりをつけない？」

ソファにどつしりと腰かけていた魔女に問う。

「ああ、気付かなかった」

…。

おれの周りにはまともなやつがないのか？
もちろんナナリーは別だ。

真横にある壁のスイッチを押す。

…。あれ…？

力チ。

つかない…。

……。

「ああ、そつだ電気がとめられていたのだった。ガスも、水道もだ」

この魔女が！なぜ出かける前に言わない？

そしたら、新たな基地を確保することができたのに。

C・Cがナナリーの要素を一部でも持っていたら…。

その時、キャノルが言った。

「ル、ルルーシユ様…私の家に来られますか？」

キャノルの一言で一斉に移動した。

学園の校門前、隅のほうに黒く大きな乗用車があった。

キャノルが乗ってきた車は十分な広さで余裕で全員のれた。

貴族なのか…？一般市民にはこれほどの乗用車は買えないだろう。

最後尾に俺が乗り込む。

「暑いぞ、クーラーを強めろ」

「あ。はい」

……で、

「C・C、なぜここにいる？」

しかも、隣。

「私をあのなにもない場所に一人で待機してると？退屈すぎて死んでしまう」

「銃に撃たれても死なない魔女がよく言うな。それに、お前昼間ずつとおれの部屋にいたじゃないか」

「それとこれとは別だ」

ああ、こいつになにを言っても無駄だな。

「では出発してよろしいでしょうか？」

「ああ」

「では…」

エンジン音が鳴る。

「うおおおい、俺を、置いてくんじゃねえ〜」

ぼろぼろになった玉城が前方に現れた。
素晴らしい生命力だ。

「どうします？」

「乗せるしかないだろう…」

仕方なく乗せてやる。

「つつたくよあ、ゼロもひでえじゃないか！俺を置いて行くなんてよー」

公道を走る車の中で玉城の笑い声が響く。
乗ってきたのはつい先ほどのだが、自分の車のようなくつろぎぶりだ。

「うるさい。それに問題はそこなのか？」

「えっ？」

「いや、いい」

どうしてここまで元気なんだ？

こいつ本当に人間なのか？

不死のコードでも入れられてるんじゃない…

しかし、長い。

もう1時間は走ってる。

もっと近くにあるものだとおもっていたのだが。
外の景色はどんどん変わっていく。

学園があつた都市からだいぶと離れ、閑静な住宅街を走っていた。

「もうすぐですよ」

「そうか」

しかしいつまでたってもこのような車を所持してそうな家は一向に見えてこない。

それどころかどんどん家の数が減っていく。

「つきました」

キャノルはそう言って車を止めた場所は獣道のような道が続く林だった。

「ここがあゝ？」

皆が戸惑う中一人しゃべりまくる。

「どういうことだ、キャノル？」

罨か？

それだったら俺を一人連れてくるはずだ。

一体どういうことだ？

「ああ、心配しないでください。僕の家は地下にあるんですよ」

と言うとキャノルはポケットからリモコンのようなものを取り出し何やら操作していた。

キャノルが操作を終え、またポケットにしまいこんだのとほぼ同時に地面が軽く揺れた。

「何だ？」

皆が一斉に反応する。

ナナリーの車いすをぎゅっと支える。

「大丈夫かい？ナナリー」

「ええ、お兄さま」

そう、よそ見をしてるうちに目の前には奥深く続く階段が現れていた。

「さあ、どうぞ。ご案内します」

どこからか懐中電灯を取り出してきたキャノルが階段を指し示す。

「ナナちゃんどうしょ。私がおぶって行こうか？」

「いや、俺が」

「そう…？大丈夫…？」

「大丈夫かよ、ゼロは知能だけで体力は名前通りゼロだからなあ」
またうるさいのがはいつてきた。笑い声はあたり一面に響く。

奴は無視して、ナナリーをおぶさってやろうと車いすの前にかがむ。

「さあ、ナナリー」

「大丈夫ですか…？お兄さま」

「ああ」

俺にだって一人の女の子を背負うくらいの力はあるんだ。
そのことを今、ここで証明してやる。

ずしんとナナリーの重さが背中にかかる。

大丈夫だ、だつこならまだしもおんぶなんだ、それくらいできるはず。
と、自分に言い聞かせるが震える足は止められない。

やっと立ち上がることはできたが膝がわらってる。

「あ、すいません。お兄さま、重いですよね？」

「い、いや…大丈夫だよ」

「さあ、いこうか」

「え、ええ」

皆が、動揺するなかキャノルを先頭に中へはいつていく。

全員入ったのと同時に扉（屋根）が勢いよくしまった。

そこはキャノルが持つ懐中電灯以外の明かりは全くない闇だった。

その懐中電灯で照らされて見えた階段の段数だけでも優に100は超えている。

それを見たルルーシュは汗が頬を伝うのを感じた。

「この階段を降りると？長すぎだ。私はか弱い乙女なのだぞ？それに暗すぎる」

これはもちろんC・C・

「大丈夫ですよ」

急にキャノルが懐中電灯をこちらに向けるものだから皆一斉に目をおおった。

「眩しいぞ！おい！」

で、これは玉城

「あの、カレンさん…でしたっけ？その辺りにスイッチがありませんか？」

「つて、無視かよ！おい」

「あつたわ、どうするの？」

「押していただけますか」

「おーい！」

「ええ」

『力ちっ』

という音が鳴るとこの空間が一気に明るくなった。
そして、響く機械音。

「うわっ」

足元の階段が急に動き出した。

「先に動くことを言え。この私が怪我でもしたらどうするつもりだ？」

「あ、すみません」

よく言うな…怪我なんて一瞬で治ってしまうのだから。してもしなくとも同じだろう？

「えっと、みなさん。下に着くまで10分以上かかるんでその辺に座ってて結構ですよ。下に着く前にアラームが鳴りますのでその際にはお立ちになってくださいね」

「ナ…ナナリー、すまない…。座るよ」

「大丈夫ですよ、お兄さま」

まず、しゃがんでナナリーが階段に座ったのを確かめて自分も座り

込んだ。

正直言つて、限界だった。足の震えが止まらない……。10分もあれば、体力も回復する…はず。

「しかし、お前、本当に体力がないんだな。よくそれで騎士団をひきいれたものだ」

「だまれ、魔女」

それを言うのが精いっぱいだった。

Re:STAGE 08 (前書き)

更新遅くなりすいません。の割にすごく短いです。ごめんなさい。

『ウー!!』

勢い良くブザー音が鳴り響いた。

「ついたみたいです」

一斉に体を起こした。

なにもこんな大きな音で流さなくても…。

「すぐに案内係を呼んでまいりますので、しばしお待ちを」

案内係なんているのか…自分ですればよいものを…

しかし、広いな…。

家とうよりは基地という感じだ。

この雰囲気懐かしさを覚える。

「いらっしゃいませ」

数人の作業服を着た男たちが恭しく一礼した。

きちんとナナリー用の車いすまである。

これが家？絶対違うだろ？

それに何人いるんだ？一人で十分じゃないか？

少し遅れて、後ろからキャノルが来た。

「何のおもてなしもできませんが、どうぞ奥へ」

ナナリーを車いすに座らせ、後についていく。

コンクリートのつめたそうな壁、薄暗い道が延々と続く。

…。まだ、歩くのか？

ナナリーを押す手がしびれてきた。

気を利かせた一人の作業員が変わりましょうか。と尋ねてきたがこの役目は譲れない。

「あ、ここに隠し扉があるんです」

そういえば、そこだけ壁の色が少し薄い。

ガゴンと重そうな音が鳴って扉が開いた。

「5秒で閉まりますのでお急ぎに…」

「ええ！！？」

あわてて扉の中に飛び込む。

ギリギリだった。いや、背中をかるくこすった。

あれ、作業員らはいいのだろうか？

「おい、あいつらはいいのか？来てねえぞ？」

同じ疑問を抱いた玉城がキャノルに問うた。

あいつと同じことを1秒でも考えていた自分が憎い。

「ああ、彼らはここに入れないんですよ。この中に入れるのは限られた人だけなんで」

「どうして？」

「組織の事情ってやつです。さあ、急ぎましょう」

やっぱり、何か怪しい。変なところが多すぎる。

扉の中は先ほど通ってきた廊下よりかなり明るかった。扉の中というよりはエレベーターの中か。

妙な感覚がさつきからある。

たぶん、かなりの速さで降下しているのだろう。

長い…一体どんだけ広いんだ？

俺でもここの構造を覚えるのに3日はかかりそうだ。

……厄介だな。

Re:STAGE 08 (後書き)

最後に、ここまで読んでくださったみなさんありがとうございます。

「ルルーシュ様？もう、みなさん先に進まれていますよ？」

え？

ふと顔をあげると扉は開いており目の前には上階によく似た感じの廊下が延々と続いていた。

ここは、地下何階くらいなのだろうか？

「どうぞ、ついてきて下さい」

「ああ」

長く続く廊下に二人の足音のみがこだまする。
ナナリーは疲れて寝てしまったようだ。

キャノルは前を進んでいく。だが、やけに道が複雑だ。
三つに分かれた廊下もなんの迷いもなしに直進して行く。

目印でもあるのかと思ったがそれはないようだ。

この建物全ての構造を把握しているらしい。

一体何年ここにいるのだろうか？

聞いてみるか

「キャノル、お前はここに何年いるんだ？」

「一ヶ月くらいですかね。あ、でも初めてここに入れてもらったのは二日前です。全く厳しいですよ、私の家なのに」

あははと笑いながら会話を進めていく。

だが内心は全くそんな余裕などなかった。

二日？まさか、そんな短期間でこの複雑な道を覚えたのか？
それ以前に地下の存在を知っていた？

それに、私の家？

初めはそう言ってたが冗談かと。居候でもしているのか？

「本当にこれお前の家なのか？」

「はい、正式には義父の家ですけど」

それで入れてもらったのが一ヶ月前？

仕事にでも出ていたのだろうか？そして何故今更ここにきた？

義父？

溢れる疑問は止まるところを知らない。

いきなりキャノルがこちらを振り返り口を開いた。

「あ、ルルーシュ様。これ知ってます？」

……？

「なんだ？」

「私、姉が一人いるんですよ。父親違いですが」

「…それがどうした」

「一体何が言いたいんだ？」

「名前はー」

それは明かされる事のないC・Cの本名だった。

C・C・！？

まさか！有り得ない。

そんな話聞いたことない。

…いや、聞いたところで教えてくれたとは思わないが。

そうそう、と、今、思い出したように付け加えた。

「あ、でも彼女が僕の姉だって知ったのは最近なんです。それまでは顔も見た事なかったし、存在さえしなかったんですから。お互いに」

ではなぜお互いに姉弟と知ったんだろうか？

やはり、姉弟という関係は直感でわかるものだろうか。

俺とナナリーのように。

「それに今の名前はC・C・っていうんですね。それって人間の名前じゃないですよねぇ？偽名でももう少しらしくすればいいのに。私みたいな感じで」

やはり、偽名か。

貴族の中ではキャノルなんて名前の奴はいなかったしな。

だが、C・C・の本当の年齢は…

ということはこいつは？

C・C・と同じようにコードを持っているのか？

「お前は何故歳をとらない？」

ああ、と軽く頷いてからキャノルはしゃべりだした。

「えっと…私のギアス覚えてますか？」

たしか…傷を移動したから…

「傷を移すギアスとかだろう？」

「まあそんな感じです。でも本当は少し違うんです。正式には自分や自分の傍にいるものの邪魔な部分を誰かに移すことができるんです。その代表例が傷なだけで、そんな要領で記憶や老化なんても移すことが可能なんですよ。便利でしょ？」

便利？それをそんな簡単な言葉で済みますのか。

それは不老不死を意味するんじゃないのか？

確かにやっかいだ。

こいつの力もつと詳しく知る必要がある。

今、敵にまわられれば俺はおしまいだ。

なにか弱点があるはず、そう、それを見つければ俺の勝ちだ。

Re:STAGE 09 (後書き)

そろそろ戦闘に入りたいのですが思うように進みません。
それに修正もしたいし…(＜|＞)時間が欲しい。
少しでもマシな作品ができるよう頑張ります。

Re:STAGE 10 (前書き)

やっと、二桁数字！（抜いて）

ここまで来ると結構矛盾点が出てきます…

いつか直しますんで見逃してください。

しばらく思考を巡らしていた。

「あ、あそこです」

唐突にキャノルが声を発したので少し驚いたが何気ないそぶりをする。

まさか、考えを読まれたりはしないだろうな…？

キャノルは長く続く廊下の先を指差す。

どうやらそこで行き止まりになっているようだ。

しばらく進むとカレン達が見えてきた。

しかし、皆、上のほうを見てルルーシュ達には全く気がつかない。

一体何があるというんだ？

ルルーシュも上を見上げる。そこには紅蓮の頭部があった。

何！？

そのほかにもそこにあるはずのないものがあつた。

屋気楼、斬月、黒の騎士団が使用していた機体はもちろん、ナイトオブ라운ズの機体まであつた。もちろんランスロットもだ。
俺が今までに見たことがある機体はほとんど揃っていた。

そしてその数のナイトメアを保管しているこの場所の広さ。

ありえないこと続きだ。

今まで俺はなぜ、こんな大きな存在に気がつかなかったんだ？

「どうですか？すごいでしょ？」

その声にはっとしたカレンが振り返った。玉城も続く。

だが、C・C・はのんきなもので欠伸までしてその場に座り込んだ。

「なぜ、紅蓮がここに？倉庫に置いてあるはずなのに」

「ああ、これはコピーですよ」

「コピーい！？なんで、お前が紅蓮の図を持ってた！？」

「図なんて持ってませんよ。ここで働く学者たちがよくやってくれましてね」

「なんで！？そんなのできるはずがないわ！」

「そう思うのならその目で確認してきたらどうですか？」

…。

そう、機体を見ていたとしてもここまで忠実に再現できるものではない。

とてつもない時間と労力がかかるはずだ。

また何かの力か…^{ギアス}。

だが、これはキャノルの力ではないはず…。

彼のは人に移すギアス。機体に移すことは不可能なはずだ。

ラクシャータや、ロイドの記憶をここの学者たちに移したとも考えられるが。

まだ、バックに誰かいるのだろうか。

だが、いない前提で動くよりはいると考えていたほうがいいだろう。

「うるさいぞ、お前たち。静かに休憩もできん」

『お前は黙ってる！』

C・C・以外の声が重なった。

さすがのC・C・も黙りこんだ。

Re:STAGE 11

「これからの戦いはこれを使うといいですよ、機能も全く同じなんです」

「ああ」

これは確かに役立つ。

「おお、そうだキャノルさんよお」

「……なんですか」

最初の沈黙には抵抗が感じられる。

「せっかくだからさあ、俺の専用機を――」
「却下です」

皆まで聞かす即答した。

「なんでだよお!!俺はゼロの右腕だぜ」
「そうなんですか?」

おい、何故その場で俺にふる!?
それくらい自分らで解決しろ。

「奴の勝手な妄想だ」

「ゼロおー!!」

玉城が絶叫する。

「やつぱり」

キャノル挑発はもうよしてくれ！

「やつぱりつてなんだよ！」

玉城は勢いよくキャノルの胸倉を掴む。

ほら、面倒になってきた。

「おい、いい加減にしろ」

あつくなった二人の耳にはルルーシュの声はもう届かない。

「ほつときましょ、ルルーシュ」

「男というのは全く面倒な生き物だな、ルルーシュ？」

俺の顔を見ながらＣ・Ｃは言う。

「その中に俺は入ってないだろうな、Ｃ・Ｃ。」

「まず、お前の体力では入りたくとも入れないのではないか？」

くっ……。人は誰しも欠点はある。

カレンの言う通りほっておくのが一番だろう。

しかし、キャノルは冷静そうに見えたんだが、やはりＣ・Ｃの弟か。

キャノルと玉城は殴り合いにまで発展していた。

「おらぁああ!!」

「うつ！」

キャノルが劣勢だ。

やはり馬鹿でも何かしら取り柄があるもんだ。

その時、キャノルの瞳が紅く輝いた。

おい、さすがにそれはまずいんじゃないのか？

「死ねええ！」

玉城がキャノルを殴りかかろうとした時だった。

玉城の体は紅い光に包まれ傷は先程の倍以上にも増えた。

「なっ」

そのかわりにキャノルの体には傷一つ、ついてない。

「力の差は歴然。どうする？」

「この野郎！C・C・！俺にも力^{ギアス}をくれ！」

「ギアスはほいほいと与えるものではない」

「…なんで、俺はいつつも損な役割ばかりなんだよあ」

そこで玉城は気絶した。

まあ、死にはしないだろう。玉城だし。

「おい、キャノル！！やり過ぎだ！」

「すみません、ルルーシュ様」

「…まあいい。（いや、よくないが）玉城をどこか寝かせられる場所に運べ」

「はい」

キャノルは玉城を背負うでなくずるずると引つ張りながらも来た道を行った。

よほど玉城のことが嫌いなのだろうか。

そういうえば、敬語さえ使っていないかったような。

「ルルーシュ、あれも、ギアスの力なの？」

カレンがルルーシュの顔を不安げな表情で覗き込む。

「ああ」

「…そう」

ギアスという力があるかぎり俺に絶対の信頼は得られない。
どうにかならないものか。

そうだ、キャノルの力でギアスの記憶を誰かに移すことはできないだろうか。

問題は誰に移すか。

俺に移すのもいいかもしれないが…あまり、気持ちのいいものではないな。

さて、どうするか。

「皆さま、疲れたでしょう。今日はもうお休みになってください。
部屋は用意してありますので」

後ろからキャノルの声がかかった。
早いな。

「早かったな」

「ええ、私の寝室がすぐそばにあったもので。そこに寝かせておきました」

「そうか」

「では、案内しますので…」

カレンや、ナナリーの部屋を案内してからキャノルは俺たちの部屋へと案内してくれた。

カレンはキャノルの部屋の向かい。ナナリーはその横。
部屋の場所には何か意味があるのだろうか。

「ルルーシュ様の部屋はここで、Ｃ・Ｃさんの部屋はここです」

俺の部屋はナナリーの部屋の前でＣ・Ｃの部屋はその前。

本来の玉城の部屋は俺の部屋の隣らしい。

キャノルの部屋は一番ナイトメア側だ。玉城をここまで運ぶのは面倒だったのだろう。（部屋と部屋の間は割と開いている）

男性群と女性群に列で分けているようだ。部屋のつくりでも違うのだろうか。

「私はルルーシュと同じ部屋でいい」

「なっ！」

強引にＣ・Ｃが部屋に俺を押しこむ。

「そうですか」

とキャノルはドアを閉めてしまった。

おい、止める！！

部屋の中は割と広がった。ホテルのスイートルーム並みだ。

地下にいくつもの広々とした部屋…まさに俺たちのためだけに作られたような場所。

さらに、ナイトメアが数十機。

もう、俺はここになにがあっても驚かない自信がある。

キャノルは何者なんだろうか？最初から俺たちがここに来ると予測していたようだ。

それと…

「C・C…！！自分の部屋に戻れ！」

くそつ、こんな奴と一緒にの部屋など最悪だ！

せつかく一人部屋を全員与えられているのに、どうしてわざわざここへ来る？

ナナリーの部屋に…いやそれはだめだ、ナナリーももう立派なレディなんだから。

こいつにはいつその言葉が当てはまる時が来るだろうか…？いや、永遠にこない気がする。

「私の部屋はここだが？」

「なら、俺が隣の部屋に行く。それならいいだろう」

「だったら、私もついて行くぞ」

おい！それでは何の解決にもなっていない！

「部屋に美しい女性がいると心が華やくだろう？お前のために私は言ってるのだ」

いや、そんなものがないから、とつとと帰れ！

『ドサッ』

C・Cはベットに倒れこむようにして寝そべった。
俺は床で寝ると？

「私は疲れた。しばらく寝るとしよう」
「おい！C・C・！！お前は——」

『スー』

C・Cの寝息が聞こえる。

この尼！！

それに、どれだけ寝付くのが早いんだ！

しかし、チャンスだ。邪魔がはいらず二人っきりでキャノルと話すことができる。

奴は部屋にいるだろうか？

まあいい、行ってみるか。

Re:STAGE 11 (後書き)

こんな駄作をここまで読んで下さった方に感謝します。

『トントン』

礼儀として一応ノックはする。

「おい、キャノルいるか？」

「あつ、はい」

と声が聞こえたと思ったらドアが開いた。

「どうぞ」

「ああ」

キャノルの部屋は俺のあてられた部屋と何ら変わりはない。違うと言えばパソコンが数台置いてあることだ。

この代数…株でもやっているのだろうか。

そのベッドには玉城が丁寧に寝かしつけられている。

そばには椅子が置いてあった。ずっと、様子を見てたのか。

よく見ればキャノルは傷を負っているようだ。

…。玉城の傷を自分に移してやったのか。

（いや、元はキャノルの傷なのだが）

一応責任感を感じてるんだな。割といいやつなのかもしれない。

「大丈夫か？」

「え？ああ、玉城さんですか？大丈夫だと思います。……すいませ

ん、こんなことになっちゃって。反省してます…」

「いや、気にしなくていい」

玉城のことではなく、キャノルの傷について尋ねたつもりだったのだが。まあいい。

「で、どうしたんですか？」

ん？そういえば傷…。なんだ…引つかかる…。まてよ。

キャノルの力は意識がないと発動しないはず。玉城は気が付いてる？それとも俺に嘘を？

試してみるか。

玉城のそばに行き、思いっきり腕をつねった。

「いつてえー！ー！！」

その瞬間玉城がベッドから飛び上がった。

「やはりか」

キャノルの嘘ではなかったようだ。

「あ、ばれちゃいましたね。だから言っただけですよ」

はあ、とため息交じりにキャノルが言う。

「二人で何をたくらんでいた？」

「いえね、部屋に戻ったら玉城さんが気が付いていて。ここに絶対ゼロが来るから話の内容を全て聞かせる、さらに傷を戻させて私の首を締めながら言うもんで…さすがにその状況に移すことはできませんし、力では私のほうが劣ってますし…」

「……。そうか。玉城は何故、俺がここに来るとわかった？」

「そりゃあ、俺はゼロの右腕だから。考えていることも丸わかりだ！」

こいつに聞いた俺が馬鹿だった。

「えっと、ゼロは俺が心配なはずだから必ず様子を見に来るはずだ。だそうです」

それも間違っているが……。って……。え？

「何で!？」

「考えが読めるのか？」

玉城と声がハモった。最悪だ。

「玉城さんの考えてることを速攻で私の脳内に入れ返しました。だから今はもう、玉城さんの考えは私の頭にはありませんよ。ただその言葉を発した記憶しかありません」

……。こいつ、敵なら俺が思っている以上に厄介なようだ。

こちらの考えてることが全て読まれるうえに、物理攻撃は移される。今までの中で最強の力^{ギアス}だな。

「俺にもやったことがあるのか……？」

そう、これが一番の不安要素だ。

「いえ、ルルーシュ様にはこのような行為、絶対にいたしません！」

「俺ならいいのかよ!？」

「ルルーシュ様の望みをかなえるためならば」

「おい!！」

「そうか、わかったよキャノル」

だが、本当のことを言っているのかどうかはわからない。

「おい！！！！おい！！！！」

「そうだ、キャノル。話したいことがあるんだが。俺の部屋に来てくれないか？」

「ええ。もちろんです」

「俺も、行つていいか！？」

「じゃあ、行こうか」

「はい」

俺が先に部屋をでる。

「つて最後まで無視すんじゃないー！！」

「。。。お前はついてくるな」

さすがに可哀想に思えたので一応返事だけは返してやる。

「ちえ。結局それかよ」

「あとで、話してやるから」

「本当だな」

「ああ」

そしてそつとドアを閉めた。

部屋まで少し歩いた。

部屋の中では当然のようにベッドを占領しているC・Cが^{いびき}鼾をかいていた。

よほど疲れていたのだろう。

「で、話ってなんですか？」

ドアを閉めると同時にキャノルが尋ねてきた。

「一度、黒の騎士団の基地へ戻ろうと思う」

部屋にある、大きなソファに座り、足を組む。
実に座り心地が良かった。

「え？今日中にですか？」

キャノルは横で立っていたが手招きしてやると俺の横にそつと腰かけた。

「いや、そこまでは言わないが。できるだけ早い方がいい」

「一体どうして…？」

これをこいつに言うかどうか迷ったがやはり利用できる駒は利用できるだけしておけがいい。

それにゼロの正体もとくに知ってるようで、この計画もいずればれることだ。

いつ話しても同じことだろう。

「俺は、騎士団を再結成しようと思っている」
「では！私もメンバーに入れてください！！」

速攻だった。キャノルは俺の手を握り目をじっと見つめている。
キャノルはこれに何かの効果をきたいしているのであるのか？
いや、それはないだろう。ないはず。

だとしたら、俺の好みを何だと思っている！？
俺の好みは世界でたった一人。そう、ナナリーだけだ。
いや、そういう問題ではない！

「…あ、…ああ」
「ありがとうございます！！あつ、すいません…」

キャノルはようやく違和感(?)に気付いたらしくとっさに手を放す。

…もしかして癖のようなものなのだろうか。だとしたら即止めてもらいたい。

「嬉しいです。ずっと憧れてたんです。あなた…ゼロの下で働けるのを」

神にいのるようなポーズですつとにまにましている。
バックには花が飛んでいそうな雰囲気だ。

…意外と天然なのかもしれない……。

「それは嬉しいが。キャノル、どうしてお前はそこまで俺を？」

そう、俺はずっとこれの答えをさがしていた。

何故、初対面の俺を敬う？ 年下の俺を？ 俺のためにならばなんでもする？

一体、お前になんの利益があつてそれをする？

第一俺は、お前の顔など今までに見たこともない。名前さえ聞いたこともなかった。

「え？」

え。じゃなくて…。どうやら本気で別の世界に飛んで行つてたようだ。

「あ！すいません！」

キャノルはやつと我に返つたようだ。

そしてキャノルはゆっくりと語りだした。

「私はマリアン又様の家系に仕えていたものです。生まれたときからもうそれは決まつたことだったので。あ、でも嫌に思ったことはありませんよ。むしろ幸せでした。

けれど、私は死ぬのが怖くてたまらないんです。だから力ギアスで病、怪我、老化をあらゆる人に移しました。そうこうしているうちに主人が寿命やらで逝つてしまふ。そして他のものたちの私に関する記憶だけを抜き取る。私の人生はその繰り返しでした。

主人に力ギアスのことを話しても拒まれる場合がほとんどでした…」

そこでキャノルは少し俯きそして全てを振り切つたように顔をあげた。

「でも、マリアン又様は違つたんです。私の力ギアスも含め全てを受け止

めてくださいました。私はあれほど嬉しかったことはありません。もう、主人の死ぬ姿を見なくていいものだと思っていました。けれど……また……。私が駆け付けた時はもう……どうしようもありませんでした。私の力には死者の蘇生は不可能……。

今なら言えますが私はマリアン又様を愛していたんです。本当に

……」

……。

「死ぬのも恐ろしくてできない私は途方にくれていました。有り余る財産を使って忘れようとしたが忘れられなかった。

いや、忘れなくなかったんです。本当に忘れたい記憶は移してしまえばいいのだから……。

そんな時、私の目に飛び込んだのが代99代皇帝、ルルーシュ様でした。私はルルーシュ様さえも死んだと聞かされていたものでしたから本当に……嬉しかった。

私は初めて神に感謝しました。その時に私はルルーシュ様に忠誠を誓ったのです。ルルーシュ様の為ならばあれほど恐ろしかった死さえも、もう怖くないのです」

それを言い終えるとキャノルは俺の目の前に移動し跪いた。

「この命ルルーシュ様の御身の為に捧げる覚悟でございます！」

頭を床にこするほど下げキャノルは言葉を捧げた。

これは……キャノルの家系に伝わる忠誠の証なのだろうか。やたら片

っ
苦しい儀式だ。

「…頭をあげてくれ」

頭を上げたもののなお、その姿勢を保ち続けるキャノルに手を差し出した。

「キャノル、俺はお前の前から消えない。絶対だ！」

「ありがたきお言葉…」

俺の手を握ったキャノルの目には涙がたまっていた。

『トントン』

その時、ドアをノックする音が聞こえた。
キャノルはびくつとして立ち上がる。

俺も立ち上がり体をドアのほうに向けた。

「誰だ」

「あ、ルルーシュ？カレンだけど今、ちょっといい？」

「構わないが…」

「失礼しまーす…って、キャノルさんいたんですか！？で、なんで
C・C・！？！？」

カレンはC・Cの姿を確認すると同時に前かがみになりギョツと
目を見開いた。

……うるさい…。

「色々あつてな…で、なんだカレン？」

「いや…ルルーシュに少し聞いてもらいたいことがあったから…」

あ、と口を手で覆いながら照れくさそうにカレンは言う。

「今、ここで話せないことなのか？」

「えっ？でも、キャノルさんが…」

「騎士団関係の話か？なら、キャノルは大丈夫だ。メンバーに加わ
るとも言っている」

「そ…そうなんだ」

何をそんなに悲しんでいるんだ？

「私、一回基地に戻るわ」

「今からか？」

「ええ、ゼロ無き後、私が騎士団を率いていたから。さすがにみんな心配しているだろうし…」

そういえば、基地を出てからだいぶ時間がたっている。

（時計は生憎持ち合わせてはいないが感覚でだいたいな）

「そうか、俺もついていこうか？」

「大丈夫！それに…あんまり言いたくないけど逆にパニックになると思うから…」

それもそうだな。まだ彼らの前に姿をさらすのは早いな。もう少し準備ができてから…。

俺の騎士団を復興させる！！

「分かった。だが、カレン一人じゃ心配だ…玉城は…まだ無理か」

それに玉城は逆に足手まといになる気がする。

「一人で大丈夫よ」

確かにカレンは一般人より数倍強いが…。

「私が行きますよ」

横でじっと見ていたキャノルが口を開いた。

「そうか、じゃあ頼む」

「え…いや、大丈夫ですよ」

カレンも警戒心というものがあるのだろう。会って一日目だしな。

「知っているかカレン、日本にはな備えあれば憂いなしという諺があるそうだ」

「え…でも……」

「大丈夫だ。キャノルは信頼できる」

戸惑うカレンの耳元でそつと呟いた。

「…車、貸してもらえますか？」

「もちろんです」

俺の言葉が利いたようだ。

「すぐ戻るわ」

カレンは部屋から出て行った。

話しかかったのは本当にこれだけなのだろうか？

C・C・に問えばだからお前はいつまでたっても童貞坊やなんだと言われるだろう。

なら、俺はどうすることが正しかった？女が考えていることは分からない。

「では」

キャノルも軽く低頭してからカレンに続いた。

…。とは言ったもののやっぱ俺がついて行ったほうが良かったか。
気になるが…今更行くのもな…。それにできるだけ混乱は避けたい。
これは正しい判断だったのだろう。

ふっと気が抜けた瞬間に眠気が襲ってきた。

「俺も休むか」

ベッドでは未だにC・Cが鼾をかいているので仕方なくソファに
座り込む。

最初はこんなところで眠るつもりはなかったが、気づいたら俺は深
い眠りの中にいた。

R e : S T A G E 1 5 (前 書 き)

今回の話はリヴァル目線です。

ルルーシュが眠りについてから数時間後。

アッシュフォード学園の寮内、ここはリヴァル・カルデモンドの私室である。

することもなく部屋で天井を見つめていたリヴァルはふと時計を見た。

2時08分

「もうこんな時間か」

今日は、朝も掃除当番で5時には起きていたが、全く眠くない。

それにしてもルルーシュがいた頃は良かった。眠れなくとも話し相手がいたから。

だが、今は違う。毎日が孤独だ。

学園に行っても話す相手なんていないし。そして、耳に入る^{ルルーシュ}皇帝の悪口。

全てが嫌で仕方がない。

どうしていつも俺は置いていかれるんだ。

どうして俺も連れていってくれなかったんだよ——ルルーシュ。脳裏に浮かぶルルーシュの顔。ミレイ会長、シャーリー、スザク、カレン、ニーナ、ロロ、ナナリー。みんないない。

みんなの顔を一人一人思い浮かべていた。

その時何か…俺に語りかけるような声がしたのだ。

…ルルーシュ？

何故だかルルーシュがそばまで来ているような気がしてならない。
ルルーシュは死んだ。それは分かっている。

でも…。もしかしたら。

気が付いたら俺は一目散に廊下を走っていた。

ルルーシュ！俺はもう——一人は嫌なんだ！！置いていかないでくれ！

「はぁ…はぁ…」

寮の出入り口で一呼吸置く。

少し息が整って着たところでまた駆け出した。

着いた場所は学園の隅のほう。暗くて見にくいが大きな木の下には木製のベンチがならんでいる。この場所でいつも昼食を食べていた。あの時はルルーシュ、みんなもいた。楽しかったなあ…。

しかし、今は当然誰もいない。

何してるんだろう、俺は？自分でもわからない。

誰もいる訳ないとわかっていたのに、こんなところまで来て。

戻ろうとベンチに背を向けた時だった。

『ガサ』

確かに物音がした。身を翻すと微かに見えた人影。
きつとルルーシュだ！

「ルルーシュ！！」

俺は思わず叫んでしまった。

「誰？」

返ってきた声は明らかにルルーシュのものではなかった。

…そうだな。ルルーシュは死んだんだ。もう、どこにもいない。

「リヴァルって言うんだけど、ごめん。人間違いだった」

「リヴァル？」

返事が来るまでに少し時間があつた。にしても何で俺の名前を復唱してるんだ？

ん？この声聞いたことある気がする…。

あっ！

「カレン！？」

「ああ、本当にリヴァルなのね。……久しぶり」

カレンとはあんまり話したことはなかったがそれでも今の俺にとってはすごく喜ばしいことだ。

カレンの声も綻んでいる。

互いに近づく。

カレンの姿は俺のよく知っている体の弱いお嬢様ではなかった。整えられた紅い髪は上に跳ね、服装は半袖に短パンだ。

「変わったね」

「変わったんじゃない。本来の私がこれなの」

「えっ……？」

「まあ、それはいいじゃない。リヴァルはどうしてこんなところにいるの？」

どうしてだろう……？

「散歩かな……？カレンはどうして？」

「ちよつと用事で行かなければない場所があるんだけど、そこに向かう途中にここが見えたから寄ってもらったの」

「そっか」

……。

静寂が辺りを包む。

「あの」
「ねえ」

二人は同じに口を開いた。

「あ…えつと何？リヴァル」
次に口を開いたのはカレンだった。

「え、あ、あのさあ、ルルーシュっていいやつだったよなあ。な、なんて、どうでもいいよな。ごめん。カレンは？」

本当に聞きたいことは口からでない。
死んだ。

その言葉がでない。

「生きてるよ」

予想外の言葉が返ってきた。俺の心を見たように。
もしかして顔にでた？

「え？」
「ルルーシュは生きてる」

まさか。それが本当ならすごく嬉しい、嬉しすぎる。
いつの間にか頬には涙が伝っていた。

「なあ、カレン。ルルーシュに会わせてくれないか？」

そう、生きているなら一刻も早く会いたい。ルルーシュに。

「それは…ちょっと…」

「お願いだよ！！もう……一人は嫌なんだ！」

リヴァルの必死さにカレンは負けたようだ。
でも、それだけじゃないような気がした。

「……誰にも言わないって約束できる？」

「ああ、なんでも約束する。俺はこう見えても一度した約束は貫き通す主義なんだ」

「じゃあ、ついてきて」

カレンが先に歩きだす。正門とは正反対の方向へ。そういえば、確かこの学園には裏口もあった。めったに使わないが。

別に何も悪いことなどしていないのだから堂々と正門から入ればいいのに。

裏口に至る道は雑草が生い茂り足元が大変不安定だったが、カレンは楽々と進んでいく。

俺もカレンを見失わないよう必死についていく。

しばらく行くと裏口が見えた。カレンはすでに出たようだ。

俺も今にも壊れそうなドアノブを回し学園外に出る。

そういえば外に出るのはすごく久しぶりだ、今まで出る必要もなかったから。

目の前には見るからに怪しい漆黒の車があった。中からカレンが手招きしているのに気がついた俺はすぐにその車に乗り込む。

うわ…ふかふかだ…。こんな車初めて乗ったよ。

助手席にカレンどうやら運転席にも、一人誰かいるようだ。

「カレンさん、どうするんですか、こんなの連れてきて…」

「大丈夫だって。彼、ルルーシュの友達だし」

「ですが…やはりこういうのは望まれてないと思いますが」

「いいのよ、友達をほっておくルルーシュが悪いのよ」

「はあ…責任はカレンさんがとって下さいよ」

「わかったわよ」

二人だけでごちゃごちゃ喋っているがどうやら俺のことを話しているらしい。

やっぱり、迷惑だよな…でも、ルルーシュに会うまでは…！

「あの？リヴァルさん？これお願いします」

と白髪眼鏡の男に渡されたのは黒い布であつた。

「えっと…なんですか？」

「目隠ししてください」

え…

「あ、はい」

ここは従うほかない。

黒い布を目に当て後ろで括る。思ったよりも厚い布で全く何も見えない。

真っ暗だ。しばらく、これって、なんか嫌だなあ…。

「じゃあ、行きますね」

車がゆつくりと動き出す。いまいちスピード感覚が分からない。平坦な道を行っていたかと思ったら急に揺れだした。山道でも走っているのだろうか。それがしばらく続いたと思ったらブレーキがかかった。

「じゃ、行ってくる」

「私も行きましょうか？」

「大丈夫！リヴァルと待ってて」

扉の開閉の音がした。どうやらカレンはどこかに行ってしまったようだ。

じゃ、今知らない人と二人つきり？うわっ…気まずいな…。

沈黙の時間が流れる。

早くこの時間よ過ぎろ！

「あの…リヴァルさん」

「はっ、はい！」

急に声をかけるものだからおどいて声が裏返ってしまった。…恥ずかしい。

「ルルーシュ様のお友達というのは本当ですか？」

「え、まあ…」

「よろしければ、ルルーシュ様のことを教えてもらいたいのですが」
「いいですけど…どうして？」

「いや…ただ単にルルーシュ様を知りたいだけで…」

ルルーシュを様付け？という関係なんだろうか。

あ、そういえばルルーシュは皇帝だったんだっけ、その時の従者と
かだろうか。

それにしてもルルーシュのこと知りたいって…恋する乙女のような
発言だな…。

「あ、そうですね」

それ以外に返す言葉が思い浮かばなかった。

「では、まず好きな食べ物は何ですか？」

そんな、小学生じゃあるまいし他人の食の好みなんていちいち把握
してないよ…。

でも、答えない訳にはいかないしな…。そういえば自分の昼食（手
作りらしい）とスザクの米を丸めたもの（日本でおにぎりというら
しい）を交換していたな…。

「え…っと、おにぎり…かな…？」

交換してもらうくらいなのだから嫌いではないだろう。

「おにぎりですか…一体どのようなもので？」

「詳しくは知らないですが、日本に昔から伝わる食べ物だそうす
よ。米を丸めその中に具を入れるらしいです」

フムフムと一人で納得しながら何かにメモっているようだ。

それから嫌いな食べ物とか、愛読書とか、好きな教科とか…。あらゆることを聞かれた。

ほとんど確かな情報ではないが…たぶんそうだろうという…。

カレンもいるのだからそっちに聞いたほうがマシかもしれない、と言ったら、すでにとの返事だ。

…ホモですか…？と疑いたくなる。

ルルーシュ、気をつけろ！

それから質問が続く。

星座は？血液型は？等等など。

んなもん知るか！！

知らないと答えるとカレンにもそう言われたらしく、深いため息をついていた。

そこまで知りたければ本人に直接聞くという選択肢はないのだろうか。

にしても、この目隠しいつになったらはずしてもらえるのだろうか…。

そう思った時、ドアが開く音がした。

「遅くなつてごめん！」

どうやらカレンが戻ってきたようだ。ちょうどよかった。目隠しをとっていいか聞いてみよう。

（男のほうに言えば早かったって？俺は人見知りなんだ）

「あのさ…カ——」

「いえ、大丈夫です」
「じゃ、戻りましょ」

俺のことを無視して話は続行される。聞こえてないのかもしれない。話が終わるまで待つか。

「…ほんとに連れて行くんですか？」

「もちろんよ、だって…」

「だって？」

「なんでもない、行きましょ」

「はあ…」

「あのさ、カレン、これとっていいかな？」
何気なく聞いただけだった。

「ダメ！」

「ダメです」

二人同時に言う。というより怒鳴ると言った方が近いような言い方だった。

そんなにきつく言わなくても…。

で、ここはそんなにまずい場所なのか…？そしてこれから行く場所はどこなのだろうか。

俺、まさか拉致される？いやいや、待て。それはないはずだ。カレンもいるし…。

いや、しかし…うん…。

ぐるぐると思考を巡らすがぱっとした答えが見つからない。
ぼーっと考えているうちに睡魔が襲ってきた。そりゃ、そうだよ、

朝5時起きだつたんだ。
でも、ここで寝るのもなあ…。とかいろいろ考えていたが気がつけば眠ってしまっていた。

「起きてリヴァル。着いたわよ」

ぼーっとした頭でカレンの顔を見る。

あれ？なんで俺こんなところいるんだっけ？

いつもの寝起きの癖で頭をかこうと後ろに手を伸ばす。

「まだ、目隠し、はずさないで」

それを見たカレンが速攻で言葉を発した。

…？目隠し…？あ、そういえば、違和感が。

「ちょっと、何寝ぼけてんのよ。ルルーシュに会いたいんでしょ！？」

——ルルーシュ……？
！！！！

「ああーっ！！」

やっと覚醒した俺はガバツと起き上がる。

空はもう白んでいた。辺りももう明るい。

「そんな大きな声出さなくても…まあ、いいわ。行きましょ。肩、持つて」

「分かった」

適当に伸ばした手をカレンが自分の肩に当ててくれる。

…優しいんだ。

そういえば、俺、カレンのことほとんど知らないかも。

ゆっくりゆっくり確実に一步一步踏み出していく。カレンも俺を氣遣ってスピードを合わせてくれた。

着いた場所はどんなところかは見えないが、あちらこちらで機械音が響く。

どこかの工場なのだろうか。

そして、俺自身も機械（エレベーター等）に乗って移動したりした。そうとう大きな工場っぽいぞ。それくらいは目が見えなくても分かる。

そして、今乗っていたエレベーターから下りる。

下りた場所は先ほどのような機械音は全く聞こえない静かな空間であつた。

別の場所みたいだ…。

しばらく進むとその場で止まった。そしてドアをノックする音。

「どうぞ」

中から声が聞こえる。

ルルーシュの声？というより女の人の声に聞こえるのだが…。

「C・C…」

「えっ？」

シートー？何かの機械か？

「いや、なんでも。ほら」

肩を押されて部屋の中に入る。

コケそうになった。こういうのは事前に言ってもらいたい。

「もう、目隠しとっていいわよ」

ドアが閉まる音と同時にカレンが言った。

待ってました！この忌々しい目隠しともおさらばだ！

速攻で目隠しをほどいた。そしてそれをとった目の前にいたのは長い緑色の髪的女性だった。

…ルルーシュは？

「カレン、誰だ？こいつは。また余計な奴を…」

俺の目の前に指を突き付けて言う。人を指さしちゃいけないんだぞ。

「ルルーシュの友達よ」

「ほう、奴に友達なんていたのか。しかしここまで来るとはな」

俺に突き付けていた指を下して口を覆う、大きな欠伸ですね…。

「で、ピザは？」

「ピザ？」

いきなりなんでピザ？

「さっき、ピザを持ってこいと頼んだのがまだ来ないのだ。お前が持ってきてくれたのではないのか？」

「そんなわけないでしょ」

「何！？私がどれだけ待ったと思っている！？」

「知らないわよ！」

すげえ自己中心的だな…この緑髪。見た目は5つ星だが。俺はお断りだな…。

「ピザ、ピザ、うつさいのよあんたは！」

「なんだと！ピザを愚弄する気か！ピザはな——」

「もういいわよ、黙って！」

女の喧嘩はたとえ口でもすごい迫力だ。

恐れをなした俺は少し（いやかなり？）その場から離れる。

それでも気がつかないようで、女二人大音量でギヤーギヤーやってくる。

それに目を奪われていた俺はソファに誰かが寝ていることなんて全く気がつかなかった。

一体なんだというのだろうか。急に辺りが騒がしくなってきた。どうやらC・Cとカレンが言い争いをしているようだ。

それはいつものことだが、どういう理由で俺の部屋にまで入ってきてそれをする？

全く理解不能だ。

しかも、人がせっかく気持ちよく寝ていたのを起こしてまで。

「うるさいぞ、C・C、カレン。喧嘩なら外でやれ」

上体を起こし言う。

「起きたのか」

「ごめんなさい、起しちゃった？」

「当たり前だ」

これで、起きなかつたら俺は死人だろう。しかし、どうしてカレンがここにいる？

その時だった。

「……ルルーシュ？」

どこかで聞いたことある声が後方からした。慌ててそちらを向く。そこには知った顔があった。

「リヴァル！？」

なぜ、ここにリヴァルが!?

…。

C・C がリヴァルを知るはずもないし、カレンが連れてきたに違いない。

それならば、カレンがここにいる理由にも結び付く。

「カレン!!なぜ、連れてきた!?!」

今度はカレンのほうに向き言う。

何を考えているんだこいつは?

「だって…彼がどうしてもって言うから……ごめんなさい」

カレンは目線を下げ、反省した様子で言う。

「待つてよ、ルルーシュ!カレンは悪くないんだ。俺が強引に——」

「もういい。過ぎたことは仕方がないだろう。すまないが二人で話させてくれ」

「あ、うん」

「おい、私に廊下で待てと?」

「自分に当てられた部屋があるだろ。そこを使え」

今だ、とばかりにC・C を追い出す。

このときばかりはC・C も鼻を鳴らしただけで出て行ってくれた。

C・C も少しは気を使っているのだろう。

扉の閉まる音と同時に俺はベッドのほうに移動しソファを空けてからリヴァルに座れと声をかける。

リヴァルはそれに従いソファに腰掛ける。（男同士で並んで座るのは極力避けたい…）

俺たちはちょうど向かい合わせになった。（リヴァルが俺を見上げる感じだ）

「…本当にルルーシュだよな？」

「当然だ。いまさら、それを聞くのか」

リヴァルは未だに信じられないという表情のまま俺を見上げる。だが、その表情には喜びも見られた。

しまいには涙を流す。

どうしていいのかわからず、ただお互いを見つめあった。

先に沈黙を破ったのはリヴァルだった。

「なんで…生きてんなら…すぐ俺に教えてくれなかったんだよお…」
目をゴシゴシと擦りながら言う。

そんなこと言われても…全民衆の前で復活したと宣伝（？）すればよかったのか？

絶対、反感を買うだろう…それに、その場で再び殺されるかもしれない。いや、冗談じゃなくて。

「…仕方がないだろう…こっちにも都合ってもんがあるんだ」

少し、冷たいようだが他にどう答えたらいいのかがわからない。

「…ごめん」

いや、謝るのは俺じゃないのか？この場の雰囲気的に。

「リヴァルが謝ることはない」

「そう言ってもらえると助かるよ。色々と動揺してて…」

ああ…それはそうだな。

死んだはずの奴が生きてるわ、変な場所に連れてこられるわ…。

「なあ、ルルーシュ！俺もさあ、ここの仲間に入れてくれよ！ボスはどこだ？交渉してくれよ」

いきなりハイテンションになるリヴァル。どうやら吹っ切れたようだ。

「それは無理だ」

「そんなに怖い人なのか？」

「いや、そこじゃない。仲間になるということだ」

「何でだよ？じゃあ、俺が一人で直接行って——」

「指揮官は俺だ！俺がボスだ。俺がイエスと言わない限り仲間には入れられない」

思わず立ち上がった言う。

リヴァル…お前を巻き込みたくないんだ。俺はもう、これ以上…何も失いたくない。

「それならなおさらいいじゃないか！お願いだよルルーシュ」

「…無理だ」

「何でダメなんだよ！？理由はなんだよ！？俺が役立たずだから？確かに俺は——」

「もう、何も失いたくないんだ！…分かってくれ。リヴァル…」

ここで引き下がってくれ…。

「じゃあ、俺が失ったものはどうなんだよ…。俺だってもう何も失いたくないんだ。俺だって…ルルーシュと同じなんだよ！」

……。

俺はどうすればいいんだ？リヴァルがいろんなものを失ったのは全て俺のせいだ。

その俺にどうして^{すが}継る？その責任を取れというのなら取ろう。だが…

「…俺が何をしているか知っているのか？」

「知ってるさ！黒の騎士団だろ」

…知っていたのか。まあ、カレンの姿を見れば分かるか…。

「知っていてどうして仲間になりたいんだ？ブリタニア人と戦うんだぞ？お前の家族だって——」

「もう、俺を一人にしないでくれ！！置いてかないでくれよ！！」

リヴァルも立ち上がり叫んだ。となりの部屋まで聞こえているかもしれない。

それほどの音量だったのだ。

確かに俺がリヴァルの立場なら同じことをするだろう。苦しみも痛いほどわかる。

…仲間か――。

「…ブリタニア人は俺とリヴァル位だぞ？」

「ルルーシュがいるならかまわないさ」

「わかった…」

「本当に？ありがとう！！ルルーシュ！！」

満面の笑みを浮かべるリヴァルと浮かない表情のルルーシュ。

リヴァルが仲間に入ること認めて本当に良かったのだろうか？

自らの責任を逃れようとしていないか？

その問いだけが頭の中に渦巻いている。

だが、いくら悩んでも答えはその時がくるまでわからないのだろう。

「そうだ、リヴァル、お前寝てないんだろっ？ベッドも空いているし寝とけよ。俺はすこし出るから」

「じゃあ、俺も——」

当然ついでにこうとするリヴァルを手で制す。

「指揮官の言うことは聞けよ？」

「…わかったよ」

しぶしぶ承諾したリヴァルはベッドに倒れこんだ。

眠たいそぶりなど全く見せなかったが、相当眠かったのだろう。

「じゃあ、行ってくるから。起きても、外へはでるなよ」

「うーん」

ちゃんと理解しているのやら…まあいい。リヴァルのことを皆に伝えに行かないと…。

そして部屋から出た。廊下は部屋よりも冷たい空気が吹きぬけている。

少し、寒い。そういえば、服等を取りに戻らないと…。ずっと同じ服ではさすがにな…。

まず、キャノルの部屋に向かう。

少し歩いた先の扉を軽くノックする。それを数回繰り返した。だが、反応はない。

どこかへ出ているのだろうか？

少し離れているが先にカレンの部屋に向かうことにした。
カレンの部屋のドアの前で同じようにノックする。
またも反応がない。

一体どうしたというのだ。本当に誰もいないのか？

すると中から微かな物音が聞こえた。ドアに耳を当て、中の様子を
探る。

「だから——に——聞けばいいじゃない」
「だ——ですが——」

いまいち何を言ってるかは聞きえとれないがカレンと…キャノルか？
何を言い争っているのか…？

もう一度、今度は強くノックした。

「はい！！」

どうやら聞こえたようだ。それでも聞こえなかったらどうしようかと…。

カレンの返事が聞こえたと思ったらドアが開いた。

「ルルーシユ、どうしたの？リヴァルは？」

「寝てる。入っても？」

「ええ。もちろん」

やはりキャノルはそこにいた。何故、カレンの部屋に？

キャノルは俺と目が合うと軽く頭を下げた。

「何してたんだ？」

後ろにいたカレンに聞いたです。

「え……」

カレンは軽く口を開いてからキャノルの方を見た。
何だ……？

「なんでもありませんよ、ね。カレンさん」

カレンに尋ねたのだが答えを返したのはキャノルだった。
そういう言い方をされるとすごく気になるのだが……。

「ええ、まあ……」

なんだ、その曖昧な返事は。
二人で何か企んでいるのか？……何のために？いや、違う……？
いくつもの疑問や答えがでてくるがどれもピンとこない。さらなる
ヒントが必要だ。

「何か隠していないか？」

キャノルはドキッとした表情で口を開く。

「な、何も隠してませんよ」

「なら、何を動揺している？」

「え……」

話を切ったのはキャノルではなくカレンだった。

「まあ、いいじゃない。で、どうしたのルルーシュ？」

良くないのだが…。まあいい。今は、事を進めることのほうが大事だ。

一息置いてから切り出した。

「リヴァルが黒の騎士団に入団したいそうだ」

「リヴァルが！？……どうして」

「理由はよく分からない。俺としてはそれを認めたいのだが…いいか？」

リヴァルのことをベラベラ話すのはさすがにな…。

「私たちのリーダーはあなただもの。ゼロが決めたことに異論はないわ」

カレンはあえて俺の名前ではなくゼロと言う。

俺自身ではなくゼロか…。

「しかし、足手まといになるのでは？ナイトメアさえ操縦できないのでしょう？」

キャノルは正論を述べている。確かに足手まといにはなるかもしれないが…。

「それでも構わない。リヴァルはああ見えて器用だからな。すぐに覚えるさ」

「これからの戦いも承知の上で？」
「ああ」

全くの迷いのない俺の返事にキャノルはそうですかと呟くだけだった。

「玉城は今もお前の部屋にいるのか？」

「いえ、自分の部屋に戻りましたよ」

「じゃあ、カレン。玉城にも伝えておいてくれ」
「わかったわ」

話は思ったよりもスムーズに進んだ。
とたんに眠気が襲う。

俺も仮眠程度しか取っていないから…。ベッドはリヴァルが使っているしな、…またソファーか…。

「おやすみ」

部屋を出る前に一応挨拶をしておく。

だが、もう、おやすみと言うよりもおはようと言うほうが相応しい時間だ。まあ、互いにまだ寝ていないのだからこれでいいだろう。

「「おやすみなさい」」

二人は声をそろえながらその言葉に答えた。

部屋に入るとすぐにソファーにもたれかかった。
ベッドの上ではリヴァルが気持ちよさそうに寝ている。

さあ、俺も寝るか。

横に並べてあったクッションを取って頭の下に引く。

ソファーに横になると足が少しはみ出たがまあ、寝るのには支障ない。

リヴァルを起こさないよう静かに眠りについた。

数日前

ブリタニア本土 帝都ペンドラゴン

城内にはいくつかの貴族たちが良く使う会議専用の部屋があった。会議部屋と言っても実際にそれを行うことはごく稀であり、大抵はチェスゲームなどの為の娯楽広場のような存在として貴族たちはここに通っていた。実際、貴族たちはその部屋を娯楽室と呼んでいる。

ただ、今日はその稀な日であり、一つの会議部屋が本来の存在理由の通り使われていた。

「これはどういうことかね、枢木卿」

数十人の貴族ら、その中の中心人物と思われる白いひげをたくわえた50過ぎと思われるいかにも貴族の容姿をした男が言う。

貴族らは中心を囲むように座していた。

その中心には色素の薄い軽くウェーブがかかった髪のまだ少年と言うべきが正しいという男が座っていた。

数十人のブリタニアの貴族に囲まれた彼、スザクは怖気づくこともせず、かといって相手を殴りかかろうともせず、ただ静かに前を見つめ座っていた。

少し離れたテーブルの上、スザクの前に出されたのはゼロの仮面であった。

「君がああゼロなのかね？」

あの、を強調して言う。

だが、スザクはその質問を無視し沈黙を貫き通す。

時間を稼がないと——ナナリーが日本に渡るまで、こいつらをここに足止めしておかないと…。

「聞いているのか!？」

他の貴族が口を荒げる。それを中心人物が静止する。

「私たちは暴力をふるうのは好きじゃないんだよ」

そういう類の言葉は嘘だとすぐに分かる。

現実に周りの貴族たちは舌なめずりをして笑っている。

「だけどね、気も長い方じゃないんだよ」

口調はあくまでも優しく幼子と会話するように、だが、内心はどうなのだろうか。

想像したくもない事実が広がっていることだろう。

だが、スザクはその事実を知っていても未だに口を開こうとはしなかった。

それ以前にさつきからの言葉はほとんど耳に入っていない。

スザクの全意識は彼が付けている腕時計に注がれていた。

あと、30分——

長い…一秒一秒が数時間にも感じる。

ガタっ、何か音がした。顔をあげると貴族らが一斉に立ち上がってこちらを凝視している。

実際にはその後ろの扉なのだが、扉を背にして座っていたスザクは気がつかなかった。

「…ゼロ!!」

——え？

その一言でスザクは貴族らの視線が自分の先にあることに気がついた。

スザクは振り返り貴族らの視線の先を見た。

その先にはあり得ない光景が広がっており、スザクは己の目を疑った。

簡潔に述べると開け放たれた扉の外にはゼロがいた。

黒いマントに身を包み仮面をかぶった漆黒の騎士がそこにはいた。

——ルルーシュ!?

スザクの頭に浮かんだゼロとなりえる人物はただ一人だった。

だが、その一人がこの場にいるわけがない。だってルルーシュは僕が……。

では、誰だ？僕を助けに来たのか？

いや…僕の味方は自ら壊してしまった。そう、僕は一人だ。

ゼロは無言のまま部屋に入ってくる。

どこから取り出したのか扉側にいた一人の貴族が拳銃をゼロに向け

構えた。

「来るな！！撃つぞ！」

いきなりの出来事でさすがのお貴族さまも動揺しているようで声にはいつもの威厳がなくなか細く震えている。

銃を目の前に出されていようとゼロは何もないように直進し続ける。

バン！！

という聞きなれた発砲音が辺り一面に響き渡った。

それは当然ゼロに向かってゼロを殺すつもりで発砲されたものであってそれを使い慣れた彼らが外すはずもないのだがゼロは平然とその場に立っていた。

貴族らの中にさらなる動揺が広がる。

だが、懲りることを知らない貴族の面々はそれぞれどこかへ仕込んでいた拳銃をゼロに向け発砲した。

いや、連射した。

耳が痛くなるほどの発砲音が響き渡り、スザクは流れ弾に当たたらぬよう身をかがめた。

火薬の臭いが立ち込める。

彼らが想像したのは床に転がるゼロの死体だった。

貴族らは発砲をやめてうすら笑いをしていた。

だが、その笑みは一瞬にして凍りつく。

未だにゼロはその場から一步も動かず平然と立っていた。

その姿を見た時はさすがにスザクもぞつとした。

カチカチッ

先ほどの発砲で皆揃って弾切れとなった銃を構えた所で何の意味もない。

補充用の弾も持っていないように皆一斉にガクガクと震えだした。

拳って部屋の隅へ移動する貴族たち、その姿は実に滑稽だった。

隅によって固まった貴族と部屋の中で一人いるスザク。

スザクの姿はその場でごく目立つ存在だった。

ゼロは歩みを止めない。

え？なんか僕の方に来てる？

ゼロはスザクに向かって足を一步一步踏み出す。

どうして？

そして、ゼロ。君は誰なんだ…。

Re:STAGE 18 (後書き)

ごめんなさい、受験で更新遅くなります。

あと、題名をRe:STAGE OOに変えたのは題名考えるの面倒だったからじゃないですよ〃(; ; D ; ;) グサツ!!

最後にここまで読んで下さった皆様に感謝です。

目の前にやってきたゼロは僕に手を差し伸べる。

「え？」

思わず声が出てしまった。

その手はスザクを通り越した先の物をつかみに行ったからだ。そう、あの仮面を。

ゼロがゼロの仮面を片脇に抱える様は異様だ。

ゼロは僕を観察するようにゆっくりしゃがみこむと同時に声を発した。

僕の耳にだけしか届かないような音量で。

「あんたが枢木スザク？」

聞いたことない声だ。

「そうだ、君は…？」

「ついてきて」

…誰なんだろう。今、この場では話せないってことなのかな。だからついてこい？

かなり怪しい感じがするが今の状況もひどい。どっちに転がっても同じこと。

ならば少しの可能性に縋ってみてもいいのではないだろうか。

それを言うとゼロはゆっくりと立ち上がり部屋の外に向かって歩き

だす。

だが、心配なのはナナリーだ。船が着くまでまだ数十分ある。カレン達はもう港にいるのだからうけれど、ナナリーが一人の時に狙われたらお終いだ。

数秒悩んだ後に僕も立ち上がってゼロの背中を追った。

貴族らは今の状況にパニックだ。わざわざ皇帝の部屋まで赴いて皇帝が不在であることを知る可能性はほぼ0に等しいだろう。

部屋を出るとゼロが横にいた。

僕が部屋を出ると同時にゼロは勢いよく扉を閉め、そして神技と言うべきスピードで施錠した。

扉が閉まる途中で悟った数人の貴族が駆けってくるのが隙間から見えたが、ゼロはそれを片手で押さえ込んでいたのだろうか。それとも扉が閉まると同時に諦めて席に着いたのか…。

前者だとしたらすごい力だ。

これでナナリーの不在がばれることはない。

皇帝の部屋に許可なしで入れる階級の者は全員この部屋の中にいるはずだ。

「明日誰かが戻ってくるまであいづらはこの状態。この部屋は外側からしか施錠できないからな。それに窓もないし」

それを言い終わるとどこからか巨大な紙袋を取り出して羽織っていたゼロのマントと持つてる方の仮面をその中に押し込めた。

マントの下は普通の私服で仮面とジーンズ＋シャツのミスマッチさが素晴らしい。

（こつこついつのつて普通仮面から外すものだと思っていたのだけれど……）

…まさかここで脱ぐとは…。よほど違和感があるのだろうか…。確かに、あの仮面は慣れるまで大変だった。呼吸がしずらい上に、湿気がすごい。さらに……。

だが、見張りの兵にでも見られたりしたらどうするのだろうか。

しかしそれを思い辺りを見回してみたがそれらしい者は一人もいなかった。というより人の気が全くない。

そういえば会議で出入り口に見張りを立てないなど臆病な貴族ではあり得ない。

まあ、その点は十中八九この『ゼロ』が何かしたには違いはないだろうけど。

だとしたら気絶した兵士がそこらにいそうなものなのだけれど。なのに姿もないとは…。

この城、全ての見張り、全ての人を消し去ったというのだろうか。それとも、部屋の中の貴族らのように全員部屋に閉じ込めている？ そんな訳はないと思うが…一体どういう仕組みなんだろう…。

うーん…。

と、考え込んでも疑問が増えるばかりで答えは見つからない。ルルーシュならポンポンと答えが浮かび上がるのだろう…。

「ス、スザクッ」

（会って数分で呼び捨て！？しかも相手の顔分かんないんだけど…）

声の方を向くと仮面を外すのにかなり苦戦しているゼロがいた。
ゼロのイメージが…。僕だって頑張ってた…のに。

「助けてくれ！！髪が絡まって、うっ、首がしまる…」

「え！大丈夫！？えっと、ここをこーして…」

しかし、他人の危機を全力で助ける。それがスザクの良いところである。

「痛っ」

「うわぁ、ごめん！」

少し…いや、かなり不器用だが…。

―数分後

「取れた！！」

仮面の下から現れた顔はまだ僕と同じ年ぐらいだ。まあ、体格からしてそんな感じはしてたけど。

顔は日本人っぽい。しかし瞳の色が金という点で日本人でないことがわかる。ブリタニア人とのハーフかもしれない。

さらに漆黒の艶やかな髪はポニーテール状態になっているにも関わらず腰のあたりまで伸びているそれが仮面が外れなかった理由である。
(かぶる時はどうしたのだろうか…)

「はあはあ…疲れた」

二人揃って壁にもたれかかった。

……。

「……で、君は誰なんだ？」

「あ、忘れてた…。一方的に名前を知られてるなんてやだもんね。俺はチス・アビュール。チスって呼んでくれ」

歯を見せて笑いながら言った。

知りたいことが山ほどあって何から聞けばいいのかわからない。口ごもっている就先ほどより5割増しの音量でチスは忘れてた！と立ちあがった。

「スザク、走るぞ！」

「え！？」

そしていきなり走りだしたチスの背中を訳も分からず追う。本当にこいつについて行ってもいいのだろうか…。

二人は風のように城内を走り抜けた。

やはりどこにも人の姿はなかった。

庭園に着くとそこには一台の白い車が止まっていた。

そこまで全速力で走る。そこまで来るとさすがにスザクも息切れしていた。

「乗って！」

言われるがまま車の後部座席に乗る。チスも続いて乗ってきた。チスがドアを閉めるよりも早く車は発進した。しかも、アクセル全開。ヴォーンとエンジン音が車内に響き渡る。

「チス！！遅いですよー！！」
「ごめん、直人^{なおと}」

運転席にいるのは…誰だ？チスの仲間みたいだけど。で、名前からすると日本人。

「全く…キャノル様の計画が狂ったらどうするのです？ああ、まあいい。任務は果たせたようですし、こちらがスザク様ですか」

「初めまして、枢木スザクです」

「初めまして。私は岬^{みさき} 直人と申します」

どうやら、本当に日本人らしい。彼も僕と同じ軍人なのだろうか。

閑静な住宅街をしばらく疾走していたのだが、道路に出るとスピードも落ち着いた、というより落ち付かざるを得なかった。

「くっ、まさか渋滞に巻き込まれるとは！」

語尾に一生の不覚と付きそうな勢いで直人は言った。

「もう、どうせ間に合わないんだしゆっくり行こうよ。ゆっくり」
「黙れ！！」

その時の直人の気迫には僕も思わずビビってしまった。しかし、その場の乗りでここまで来てしまったが一体どこに連れて

行かれるのだろうか…。

害を加える気はなさそうだけれど…。

彼らの目的はなんだろう？

Re:STAGE 19 (後書き)

更新、かなり遅れてごめんなさい。

入試終わりました^^発表はただけど…。

受験って本当に嫌なものですよね…。もう何回泣きそうになったか。まあでも、滑り止めは合格したんで、最悪そっち行きます。

今見れば、回覧数17万!!どうもです^^

あと、お気に入り登録してくださってる方感謝です。

今回の話はまた新キャラが二人も。出しすぎですかね…。

話の内容は相変わらず愚だ愚だでごめんなさい。

最後にここまで読んで下った皆さまに感謝の気持ち。

夢を見た

全てが消え去る夢を、俺だけが残る夢を

絶望に打ちひしがれる

君を守るためならばこの命さえ惜しくないというのに

どうして君が消えて俺がここに残る

悪逆皇帝は地獄に落とせ

這い上がれないようにするための蓋を忘れるな

さすれば光を見ることさえ叶わなくなったのに

俺も人だから希望に縋ってしまう

それをできなくするための蓋なのに

どうして君は無邪気に蓋を開く？

すぐに鍵をかけて

何重にも鎖を巻いて

それか俺のこの腕を取り去ってしまっても構わない

手なんか延ばさないでくれ

俺の手なんか掴まないでくれ

君の手が黒に染まるから

早くその手を放して俺をさらに深く落とせ

伸ばす手を増やさないでくれ

俺に微笑まないでくれ

幾人もの手が俺をつかんで持ち上げる

どうして悪を救うのか

闇に突き落とすべきなのに

明るい光に抱かれ俺を取り巻く闇が消える

それと同じように君の体も消えてゆく

みんなが消えてゆく

この身を捧げて君が帰ってくればどれだけいいか

すべては幻

一人這い上がった

残った俺がすべきことを教えてくれ

今こそ再生の鐘を打て

すべては残った最愛の人のためだけに

この手を揮うことを誓うから

すべてが終わればその時は…

何があったというわけではないのだがはっと目を覚ました。

何か夢をみたような気がするが内容はまいち思いだせない。

しかし、今、何時だ？時間が全く分からない。地下だからなおさらだ。

今は朝かそれとも夕方か？俺はどれだけ寝ていた？

狭いソファの上で体をねじって上体を起こすと、ベッドの上にはまだリヴァルが枕を抱えながら気持ちよさそうに寝ていた。

リヴァルの方が先に床についたはずだが…、まあ俺は二度寝だったしな。

ということとはそれほど時間がたっていないのだろうか。では今は昼少し前くらいか。

勝手な時間予測で頭を捻っているうちに何かの物音に気が付いたのかリヴァルがのそのそと起き上がってきた。

「おはようー、ルルーシュ」

「ああ、おはよう」

簡単な挨拶だけを交わし、リヴァルは俯いたまま何も言わなかった。

……。

何が聞きたいかはわかってる…。

だが、それを明かしてしまったら俺は…。

「一度、アッシュフォード学園へ戻ろうと思う。服やらをとりに戻

りにな。リヴァルも行くか？」

「もちろんだよ」

「では、キャノルに話をつけてくる」

「わかった、じゃあここで待ってるよ」

それだけ言うとルルーシュは部屋から出ていった。

ドアが閉められると同時に溢れんばかりの気持ちを抑えるためにぐつと拳を握りしめた。

ルルーシュ…。

俺が何も知らないと思ってるのか？

わかってるよ、ルルーシュ。

何年友達をしていたと思ってるんだ？

でも、どうしてあんな無茶をするんだ！

…いつまでたっても俺には理解できないよ。

どうして話をしてくれないんだ。

……どうしてお前はいつも一人で戦うんだ！

「くそっ」

握りしめた拳でベッドを叩く。

何度も、何度も…。

それは何もできなかった自分への憎しみだったのかもしれない。

俺は、相手を倒す力なんてない。

でも代わりに刃を受けることは可能だ。

そう、俺にだってそれくらいはできるはずだ。だから…俺は

「お前の盾になる」

自分の心に刻みつけるよう呟いた。

その時そつとドアが開いた。

！！！？

今の、聞こえてないよな？

自分で言っときながら恥ずかしい…。大丈夫だ、小声だったし。

大丈夫。大丈夫…たぶん。

「リヴァル、今すぐいけるか？」

部屋の外からルルーシュが声をかけてくる。

「ええ、あ、いけるよ」

俺は何も持たず部屋を後にした。

ルルーシュもなにも持っていないし手ぶらでいいだろう。

「では、ご案内いたします」

ルルーシュの横には恭しく礼をするキャノルがいた。

…どうも彼は好きになれない。

全く俺と別次元の人間ってかんじだ。

それも、強ち間違いではなのだがそれにリヴァルが気付くのはもう少し後のこと。

でも、俺はここで生きていくと決めたのだからそれも慣れないと…。

リヴァルが色々考えているうちにキャノルとルルーシュは廊下を進む。

俺もそれに慌ててついていくと、目の前には立派なナイトメアがあった。

見たことのない真っ青な機体。

…もしかしてナイトメアの操縦とかも覚えなきゃなんないのかな…。それで戦うんだよね…。

……。どうしよう。

「リヴァル！！はやくしろ」

二人はもうエレベータ？の中に立っている。

「うわっ、待って！」

駆け足でそこに飛び乗った。

しばらくたってあめのナイトメアの青い色が目から離れなかった。

Re:STAGE 20 (後書き)

更新遅れてごめんなさい。話短くてごめんなさい。

そして…

ついに20話突破！

いや、実際はとっくに超えてるんですが…。

アクセス20万突破！

少し前の話ですが…。

いやいや、気にしない！（おい

受験戦争が終わったかと思うと今度は課題たちが襲いかかってきて
やっと昨日倒したところなんですよ（汗

春休みも後、3日。

もう高校か…。実感わかない。

高校の勉強はさらにむずかしいと聞くのでさらに更新遅くなると思
いますが、よろしく願います。

できるだけ早く書けるよう頑張りますので応援よろしくです^^
ここまで読んで下った読者の皆様に感謝です。

R e : S T A G E - 2 1 (前書き)

割り込みとかややこしくしてすみません。

これから割り込みで新しく書いたところにはNEWって入れたいと思います。

「あ、キャノルさん」

明るい廊下にでた瞬間、真横から声がかかった。

薄水色の作業服を着ている若い男。どうやらキャノルの部下のようだ。

「どうかしましたか？」

「ええ、さっき謎の人物から電話がかかってきて一つのアドレスを言って切れたんですが…何か知りませんか？」

「アドレス？」

「ええ、どうやら動画投稿サイトのようなのですが…パスワードがかかっていて見れないんですよ」

「ルルーシュ様。少し時間をいただいても？」

困っている様子の部下を見てキャノルは少し顔をしかめながら言った。

「ああ、構わない」

急ぎのようでもないしな。しかし、リヴァルには聞かないのか。仲があまり良くないようだ。

まあ、リヴァルなら尋ねられても二つ返事でOKしただろう。

実際リヴァルは後ろでにこにこしている。何がそんなに楽しいのやら。

廊下で待っていても仕方ないので付いていくことにした。

またひたすら長い廊下を歩かされるのかと思えば割と近いところにネット設備があつたのでほんの数分歩いただけだった。

「これです」

キャノルの部下の手によって開かれたサイトは世界的に有名な動画投稿サイトであつた。

ただ普通と違いエラーメッセージが中央にでかでかに表示されている。そこには長方形のマスがあり横には p a s s と書いてあつた。どうやらパスワードを入れないことにはサイト内に入れないらしい。どうやってこのメッセージを出しているのかは全く分からないが今はそんなことより先にパスワードは何かを考えた方がいいだろう。

「パスワード…何か思い当たるものはないですか？」

キャノルが俺（とりヴァル？）に尋ねる。

「ない」

「ないなあ」

俺とりヴァルは同時に否定の答えを返した。

だからといって適当に入れて当たる可能性など皆無でありもし何かのトラップが仕掛けてあればデータが壊れてしまう可能性もある。ここは一回で確実にパスワードを当てられる方法を見つけなければ。しかし、このサイトのアドレスを言った人物は俺たちに何をさせた
い？

パスワードだつてわかりもしないのに。パスワードを見つけさせる
ことが目的か？

「ブルルルルル」

その時、部屋にあった電話が鳴った。

キャノルの部下がパソコンの前から席をはずし受話器を取りに行く。その間、俺たちはそのエラーメッセージをずっと眺めていた。

ほんの1分くらいで彼は戻ってきた。しかし、理由はよくわからないが浮かない顔をしていた。

「誰からでした？」

すかさずキャノルが尋ねる。

「それが…」

「早く言ってください」

「このサイトのアドレスを言った同一人物らしく、今度はパスワードを…」

パスワードだと？

では、この動画を見せることが目的か。

それに何故こんなタイミングよく…？まさか誰かに監視されている？

部下が聞き取ったパスワードは恐ろしく長くただの記号の羅列であった。

メモを見ている様子もなかったただひたすら記号を打ち込んでいく。(メモすらとっていないのかもしれない)ただただ、その様子に関心していた。

もしかしたら間違ってるんじゃないかとも思ったがそれもいらぬ心配だった。

最後の一文を打ってエンターキーを押すと見事にサイトに入るこ

とができた。

ただ普通と違い、どのリンクを押しても飛ぶことはできず一つだけ赤く点滅するボタンを押すことになった。それは動画の再生ボタンであった。

数秒は真っ暗で何も映らなかったがしばらくするとブツンという音と同時にある部屋が映った。

それは俺たちがよく知る場所だった。

「これ、ルルーシユの部屋じゃ…」

そこには数日前の俺の映像が映っていた。

キャノルが俺の傷を治すところ、C・Cが寝転がって欠伸をしている様子。全てが鮮明に映っていた。

いつの間にこんなものが…。

これを使って俺を脅すつもりか？

俺たちはその映像を最後までじっくりと眺めていたがただ俺が生きているという事実を映しただけの映像のようだ。

ここに脅迫文でもいければ分かりやすいものを。一体犯人は何がしたいんだ？

とりあえず、部屋に行ってみるしかないか。

「…どうします？」

「どうするものにも撮られてしまった以上どうにもならない。部屋に戻ってみよう。もしかしたら何か見つかるかもしれない」

「そうですね。と、その前に…」

キャノルはごそごそとポケットから何かの装置を取り出した。

そしてそれを持って部屋を歩きまわりだした。

「ああ。やはり」

一人で頷くとキャノルは壁にペンでバツ印を付け始めた。
その数は10を超えていた。

「こんな狭い部屋によくこれだけのもの付けましたね」

「サレンさん。このバツ印の奥に盗聴器もしくは監視カメラがありますので外しておいてください」

「わかりました」

「ああ、念のためこの設備全てを『今日中に』調べてくださると助かるのですが…」

今日中にを強調して言う。しかもこの設備だと？どれだけの広さがあると思っているんだ。いや、俺よりこいつの方がよく知っているか。

「はい、了解です」

さらに二つ返事で了承する部下。一体どうなっているんだ、こいつらは。

「君、一人でやるの!？」

すかさずリヴアルが突っ込みを入れる。

「いえ、さすがに一人では無理ですよ…。何人かに手伝ってもらいます」

「何人かって…何百人いても足りないくらいじゃ…それに今日中だ

よ？」

「大丈夫です」

やけに自信満々に言うサレン君。

「そう…？そこまで言うなら何も言わないけど…」

キャノルはただうるさそうに眼を細めていた。

「じゃあ、行きましょう」

キャノルがドアを支え開けた。

「頼みましたよ」

俺、リヴアルの順で部屋を出る。

キャノルはドアを放し少し開いた隙間からサレンに声をかけた。

「はい。キャノルさんが帰ってくるまでに調べてあげて見せます」

徐々に狭くなっていく隙間から見たのは敬礼をするサレンだった。そんな意気揚々と…俺たちが帰ってくるまでって長くてもう時間くらいじゃないか？

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない。さあ、行こう」

「そうですか？では、こちらです」

そうして長い廊下をひたすら歩くことになった。

R e : S T A G E - 2 1 (後 書 き)

ここまで読んで下さった皆さまに感謝します。
これからも応援よろしくお願いします。

Re:STAGE - 22 (前書き)

これは最新話じゃないです。一個上です。ややこしくてすみません。

着いたぞ、リ――

こんなところまで強引についてきてしまったけど、俺は…

おい、リヴ――

俺は彼に必要とされている存在なのだろうか…？

その時、そつと肩に手が触れた。

「おい、リヴアル？大丈夫か？」

ルルーシュ…。

「えっ？あ、うん」

「…そうか、着いたぞ」

目の前にはいつものように広がる広大な庭園。
ただ、いつもと違うのは人気がないだけ。

「キャノル、俺の部屋分かるな？これが鍵だ」

さすがに今、外にでるのはちょっとな…まだ寮内に生徒は残っているだろうし、俺の姿を見られたら少々厄介だ。

「ええ、ここに来るのは私一人でも良かったのに…」

「いや、俺は少し調べたいことがあってな」

「無茶はしないで下さいよ」

「ああ、わかってる」

「じゃあ、部屋に行って着替えを取ってきたら良いんですね？」

その問いに軽く頷くとキャノルは早歩きで去っていった。

頼むぞ、キャノル…。

「リヴァルはどうするんだ？」

「え、じゃあ、俺も着替え取ってくるよ」

「わかった、ああ、リヴァル。俺のことは誰にも言わないでれよ」
「分かってるよ、じゃあ行ってくる」

リヴァルもこの場から立ち去った。

リヴァルの姿がだんだん小さくなり、やがて見えなくなった。

さてと…

上着のポケットから取り出した小型の無線機を繋ぎセットする。

「キャノル、聞こえるか」

「ええ」

「やはり、監視カメラが仕掛けられていましたね。全部で5個ですね」

「そうか、言って見れば当たり前だな」

俺たちの中に裏切り者がいないとすると、だがな…

「どうします？壊しますか？」

「ああ、今更だがな。…まあ、本拠地さえばねればいいさ」

「では、後ほど…」

「で、そこから逆探知はできそうか？」

「今、試みていますがなかなか…」

「そうか…何か分かったら教えてくれ」

「分かりました」

しかし、いつから監視カメラが…。

出かけていた時はC・Cがいた。では、俺の意識がなかった時からということになる。

…キャノル、か？

いや、だがキャノルを部屋に呼んだのはC・Cだ。では、一体だれが…。

それに犯人は俺が死なないことを分かっていた？

「ねえ、あんたルルーシュだね？」

！？

声がした方を向くと開けられていた窓から一人の男が顔を突っ込んでこちらを見ている。

口元に微笑を浮かべ金に輝く瞳で俺を捕えていた。

深く帽子をかぶり外から顔が見えないようにしていたのだが…。

くそっ、人気がないからといって油断していた。

こうなれば、ギアスで…。

プッ

無線がつながる。

「ルルーシュ様、逆探知できました。えっと…場所は…」

「キャノル！」

「どうしました？」

…なんでこうもタイミングが悪いんだ！？

「あゝ、やっぱり」

「その声はチス？」

え？

「はい、そーですよ」

キャノルにチスと呼ばれた少年は無線機の音をよく聞き取ろうと体の半分以上を窓から突っ込んでくる。

……。敵ではない……？

「直人はそこにいますか？」

「いいえ、いませーん」

「そうですか…」

「あ、そうそう——」

このまま放置していたらいつまでも話が続きそうだ。

「キャノル、こいつは誰だ？」

強引に話に割って入る。

「ああ、すいません。簡単に言えば私の部下です。直人という人物もそうなんですが、今はいないみたいですね」

「部下？」

「ええ、私もこう見えて一企業の時期社長ですからね」

「ああ、そういえばそうだったな」

「あ、忘れてました。えっと、ある程度は逆探知できましたよ」

「場所は？」

「エリア１１ですね」

「そのどこだ？」

「…あ、それ以上はわかりません…向こうが回線を切ってしまったみたいで…」

「そうか…」

「…お役に立てず申し訳ございません」

「いや、十分だ。ありがとう、助かった」

「私の役目ですから。では、荷物を持って戻ります。チス、」

チスは一旦引っこ抜いていた顔をまた突っ込んできて返答する。

…そこで聞こえているのならその場でいいじゃないか…。

「はい？」

「私が戻るまでルルーシュ様の警護たのみましたよ」

「りょーかい」

「では」

プツンという音とともに無線が切れた。

「じゃあ、よろしくルルーシュ様」

チスは顔を突っ込んだまま俺に握手を求めてきた。

…変な光景だ。

だが、断る理由もないので、おなじように片手を伸ばしてチスの手

を取った。

「ああ、よろしく」

そしてチスは手を取りながら嬉しそうににっこりとほほ笑んだ。
なんてことはないのだが少し心が軽くなったような気がした。

Re:STAGE - 22 (後書き)

最後になりましたが、ここまで読んで下さった皆様に感謝です。
あと、感想、評価して下さい。た方本当にありがとうございます。

ごめんなさい、これから更新すつごく遅くなると思います。
高校が思ったよりハードなので…。

これからも応援よろしく願います。

空はいつからこんな澄んだ色をしていたのだろうか？

俺は全て見失って何も手に取られないまま消える。

新しい星は死んだ星のすぐそばで生まれてまた同じ運命を繰り返す。
ただ毎日を生きたため輝き続ける。

それが誰かの手によってだとしても、俺は気付かないままただひたすらに走り続ける。

今にも消えてしまいそうなあの星は一体誰のものだろう。

そんな疑問の答えさえ見つけられない。

自分の姿を忘れた俺は自分が見つけられない。

誰か俺の星に光を灯してくれ。

Re:STAGE - 23 (前書き)

大変更新が遅れ申し訳ありませんでした。

Re : S T A G E - 2 3

キャノルの姿がうつらと確認できたのはそれから数十分後だった。

遅い…なにをしていたんだ。

ただ、姿が近くに見えるにつれてその何故が明らかになった。

その浮かび上がったシルエットは彼の数倍に膨れあがっていた。

だんだん近くに来るにつれてその正体が明らかになる。

俺は思わず叫んでしまった。

「なんだ、その荷物は!？」

「いやあ、なんだかんだでこんなことになっちゃいまして」

…そのなんだかんだを教えてほしい。

彼の背中には俺が使っていたベッド、テレビ、パソコンなど俺が要求したものでないものが括り付けられていた。

「あ、ちゃんと衣服もありますから、心配しないでください」

訝しげにそれを見る俺の気持ちを察してキャノルはまたひときわ大きな紙袋を差し出した。

数日分だけでよかったのだが…持ってこられたものは仕方あるまい。

無言でそれを受け取ると、いつの間にか隣に座しているチスと言う者の紹介をしてもらおうと声をかけた。

どうやら話を聞いているからに彼らは単なる上司と部下という関係ではなく、そこには複雑な物語があるようだった。それを語ろうと

はしてくれなかった。それに何か言いにくそうな雰囲気では話題を変えられてしまった。必用にそれを尋ねるのもヤバだろうと思ひそれ以上は尋ねることもしなかった。

誰にだって知られたくない過去くらいはあるのだろう。そう、俺のように。

「じゃあ、帰りますか」

と、キャノルはにこやかに笑う。

「リヴアルが…」

「さあ、行きましょう」

キャノルはわざとらしく聞こえないふりをして運転席に着いた。そしてハンドルを握りしめ、止める間もなく車を急発進させた。

「な、本気で置いていくのか!？」

えー…と、いう表情でキャノルが問う。

「連れて帰るんですか? てつきり置いて帰るために連れてきたのかと…」

連れて帰るにきまつてるだろう!と返事しようとした瞬間にふと考えてみた。

彼にとっての幸せとは何なのだろうか。俺について来る限り歩く道はいばらの道だ。それが幸せと言えるのだろうか。答えは否。

彼には愛する人もいる。家族もいる。…俺とは違う。

リヴァルが側にいてくれるだけで何かと心強い。どんな時も、いつも側にいて笑いかけてくれる。そんな彼の優しさに溺れていたたい。それは甘えなんだとわかってる、でも――

「彼にとってもこれ以上関わらない方が幸せかと」

そこにキャノルの言葉。それが俺の中に突き刺さった。もう、誰にも悲しい顔をしてほしくない。

「…そうだな」

「では？」

もう、聞かないでくれ。わかってるだろう？

「置いていく」

「じゃあ、帰りますね」

キャノルはいつものように微笑むと車を発進させた。トップスピードで。

「ルルーシュさまって優しいんだねえ？」

くすつと笑いながらチスは首をかしげる。その行為が無性に苛立つ。

――俺は優しくなんかない

本当の優しさは何なのか考えてみた。俺にもっと力があればいいのに。

きつく、拳を握りしめた。その時、俺の前にずっとチスが身を乗

り出した。

「でも、なんで僕たちを捨てたのかなあ？ねえ？ねえねえ——！
」

笑顔でチスは俺に問うてくる。しかし、先ほどの笑顔と違いそこには憎悪が見える気がした。

——捨てた？なんのことだ？

「チス——！」

そこでキャノルの叱咤がはいった。

チスはそれに少しおどいた様子で目を細めた。

「……どういうことだ？」

「いえ、ルルーシュ様には関係ないことですから」

その口調は今までよりきつく、これ以上は聞けない雰囲気になる。なんだ、何があった？彼らに初めて会ったのはごく最近のことだ。……捨てただと？どうなっている……。

——ずっと、昔会ったことがある？

「……どうせ俺らのことなんて覚えてるわけないよなあ。ゴミ同然なんだもんなあ」

チスはキャノルに聞こえないよう、極小さな声で呟いた。

「え……？」

「どうなさいました？」

「いや、なんでも……」

彼らは、過去の俺を知っている。キャノルは母に仕えていた身なのだから当たり前かもしれないが、チスは？あと、直人という人物は？
…もう、なにがなんだかわからない。

頭を抱えなくなるが堪えて、高速で通り過ぎる風景を眺めていた。

リヴァルは着替えを取りに自室に戻っていた。

寮内はいつもの騒がしさはなく静まりかえっている。あの、事件の後、学校が臨時休校になっており大半の者は自宅に戻ってしまっているからだ。

「えーと、これくらいでいいか」

適当な袋に2、3日分の衣類を詰めた。

忘れ物は、ないだろうか。もう一度部屋を見渡した。

「よし、完璧」

それから念入りに3回ほど見まわしたが特に必要なものは見つからなかった。

衣類の入った袋と適当な貴重品をポケットに入れてドアノブに手をつけた。

ガチ、ガチャ

「…開かない？」

鍵はかけてない、いつも丁寧に管理されている寮なのだから故障でもない。
ドアノブをガチャガチャと捻ってみるが一向にドアは開こうとしなかった。

「なんでだよ!？」

体当たりをしてみるが、丈夫な素材で出来ているようでびくともしない。

くそっ…

携帯で外に連絡を取ろうと画面を開いた。真っ先にルルーシュに電話をかけるが、一向につながらない。
苛立ち気に画面をのぞくといつもフルで立っているはずの電波が一本もなかった。

「はあ!？」

ここまでくると人為的な何かが働いているとは思えない。
でも、誰が？

次の手段として、ロビーにつながる電話を試してみる。
ブツン
つながった!？

「しばらくお待ち願います」

しかし、そこからしたのは無機質な音声だった。

「はあ!？ふざけんな!」

受話器を床に投げつける。

窓から飛び降りるにも高すぎる。ロープもない。八方ふさがりで膝を抱えることしかできなかった。

それから何分立っただろう。ひどく嫌な予感がした。

ドアの向こうで何か音がした。急いでそちらへ向かうと、勢いよくドアが開いた。その向こうに立っていたのはいつものメイドさん。

「いたずらにしてもひどいですよね？」

彼女は太く長い木の棒を差し出した。どうやら、これがドアに引っかかって開かなかったようだ。

誰がやったのか、そんなことは後でいい。メイドを全くの無視をして、せっかく詰めた衣類の入った袋さえ置いて全速力で廊下を駆け抜けた。

——ルルーシュ！

スピードを保ったまま広い庭も駆け抜ける。風を切る音が耳に入る。もと場所に戻って来た時にはただ立ち尽くすことしかできなかった。だって、そこにはあるはずのものがなかったのだから。

——置いて行かれた

その事実が残されただけだった。今思えばなんて軽率な行動だったのだろう。着替えなんてどうでもよかったのに。

——ああ、やっぱり俺は何にも出来ない役立たずだから、お荷物だ

ったのかなあ。そんなのやだよ。

堪え切れずに涙があふれる。

置いて行かれた事よりも自分の無能さに腹が立った。

ポツリと雨が頬を濡らした。やがてはザーという音に代わる。けれど俺はその場に立ち尽くしていた。どんどん濡れて体温を奪われていく体。

変わってしまった。何もかも。

ああ、なんでこんなことに今まで気がつかなかったんだろう。皆、変わったのなら俺も変わればいいじゃないか。

一度目を瞑ってみる、再び目を開けた時にみた世界の色は雨の中なのにとても明るく見えた。

ルルーシュ、待ってて。俺は君の為に変わる。誰よりも強くなろう。

雨にぬれた前髪をかき上げた。そのまま前をしっかりと見つめたまま学園を後にした。

Re:STAGE - 23 (後書き)

次話も遅れるかもしれませんが。今まで読んで下さった皆様に感謝です。

しばらく来ない間に38万アクセス感激です!!

それになんか章とかよくわからないです(汗

このまま続行していいかな…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8715g/>

勝手にコードギアス

2011年5月25日02時05分発行